「研究科プロジェクト」成果報告書
『文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る』
（「日本文学を世界文学として読む」第２弾）

令和2年（2020）3月31日発行
編集　堀まどか
発行　大阪市立大学大学院文学研究科　都市文化研究センター
〒558-8585　大阪府大阪市住吉区杉本3-3-138
電話 06―6605―3114
ホームページ　https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/UCRC/ja/

印刷　博進印刷株式会社
〒559-0002　大阪府大阪市住之江区浜口東2-7-24
電話 06―6678―5151

Urban-Culture Research Center
大阪市立大学大学院文学研究科　都市文化研究センター

2019年度・「文学研究科プロジェクト」成果報告書

「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」

【論文】
慶滋為政の和歌序 ―摂関期の和歌序の特質―
山本 真由子　(1)

『今鏡』と『大鏡』の皇妃描写 ―「帝王の寵妃」という人物描写について―
小笠原 愛子 (15)

The Reception of ‘A Fairy’ in Modern Japanese Literature:
‘Changelings’ from Irish fairy folklore in Hiroko Katayama’s Works
NAGAI Izumi 左(1)

【研究報告】
世界史叙述メディアの新地平 ―学習歴史漫画を超えて―
草生 久嗣　左(7)

ドレフュス事件から見る「ユダヤ」と「文学」
鈴木 重周　左(19)

西部劇イメージを利用したポピュラー音楽の戦争を経た翻訳
永冨 真梨　左(25)

外国人旅行者の意識からとらえた中崎町のイメージ形成
嵜本 圭子　左(31)

文学研究から文化研究へ ―「文化構想学」科における教育・研究へ向けて―
堀 まどか　左(41)

研究会報告　(ⅰ)
執筆者プロフィール　(ⅵ)

大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター(UCRC)

慶滋為政の和歌序
―摂関期の和歌序の特質―

山本真由子

摂関政治の最盛期に活躍した、慶滋為政（よししげのためまさ）は、この時期の文人としては珍しく、漢文と和文（仮名文）の両様の和歌序を残している。為政の序の特質の一つは、漢文と和文の差を超えて、序の内容や表現が近似していることである。もう一つの特質としては、下命する歌会の主宰者への配慮が、作品の表現、さらには、漢文、和文の選択を大きく規制していることが挙げられる。

一、はじめに

（一）和歌序の変遷

小論は、摂関政治の最盛期に活躍した文人官僚、慶滋為政（よししげのためまさ）の漢文と和文（仮名文）の和歌序二篇を取り上げ、その特質を指摘しようとするものである。まず、二篇の序が作られた状況を明らかにし、その表現を詳しく読み解いた上で、二篇を比較し、為政が同じ和歌序というジャンルの作品を、なぜ漢文と和文とで書いたのか考えてゆきたい。

「序」というジャンルについては、本稿に先立つ「和歌と漢詩―平安朝における実例をめぐって―」[1]において説明した。一部修正して再び述べると、「序」とは、中国文学の一つのジャンルで、序文や前書きに相当し、序が冠せられる作品の概要や制作状況などが記される文章をいう。ただし、「序」は、一般にいう序文とは異なり、それだけで鑑賞し得る作品であるという特徴がある。中国では七世紀の初唐の時代に、宴集で作られた漢詩に冠せられる「詩序」が多く書かれるようになった。これに倣って、日本では、八世紀の奈良朝で、詩序が制作されるようになり、程なく歌会で詠まれた和歌の序「和歌序」も作られるようになった。十一世紀半ば、平安朝において編纂された邦人の漢詩文の総集である『本朝文粋』の「和歌序」の部門には、歌会の序に加えて、歌集の序が収められている。

前稿では、以上のように述べた後に、奈良朝の例として、天平二年（七三〇）正月に、大宰帥大伴旅人が大宰府で梅花の宴を催し、漢文の和歌序と和歌三十二首（萬葉集・巻五）とが作られたことに触れている。この和歌序は、偶々、拙稿の発表から間もなくして、新元号「令和」の出典として注目されることになった。『萬葉集』では、和歌の詠まれた事情を記す詞書（題詞）などの散文は、すべて漢文で記されているから、

この和歌序が漢文であることは改めて言うまでもない。

和文（仮名文）の和歌序は、平安朝が始まって百年ほど後に現れる。現存最古の歌集の序として「古今和歌集仮名序」がある。この序は、延喜五年（九〇五）の日付があり、紀貫之が書いたと推定されている。また、歌会の序としては、貫之の手に成る、延喜七年の「大堰川行幸和歌序」がよく知られている。これらの序は、日本語で書かれた散文としても最初期の例であり、日本文学史上においても特記すべき作品である。勿論、同時期には大江千里「三月三日吏部王池亭会十四首幷序」（扶桑古文集）などの漢文の序も引き続き制作されている。貫之も、晩年の天慶年間（九三八―九四七）には自らが編んだ『新撰和歌』に漢文の序（本朝文粋）を冠している。なお、一般に平安朝の和歌序については、仮名文の序を「仮名序」、漢文の序を「真名序」と称する。また、歌会の序は「序題（代）」、「小序」とも呼ばれる。

その後、政治情勢は、冷泉天皇の康保四年（九六七）に藤原実頼が関白となり、治暦四年（一〇六八）に藤原氏を外戚としない後三条天皇が即位するまでの百年余りにわたって、いわゆる摂関政治が最盛期を迎える。この時期の和歌序については、現存する作品を見る限り、興味深い傾向が窺われる。すなわち、和歌序の形式に対する好尚は、この時期に、仮名序から真名序へと移り変わったのではないかと思われるのである。初期にあたる村上朝の末・冷泉朝から花山朝にかけて（九六〇年―九八六年頃）は、平安京六条坊門の南にあった河原院で交遊した歌人たちによって、仮名序が多く書かれており、歌会の序は七篇、歌集の序は二篇を数える[2]。作者である源順、橘正通などは、詩序も残しており、漢詩の序である詩序は漢文で、和歌序は和文で書くという区別をしていたように思われる。一方で、同じ頃、紀伝道を専門とする菅原文時は、貞元二年（九七七）の左大臣藤原頼忠邸の歌会で、真名序を記している。

一条朝（九八六―一〇一一）においては、藤原行成、源道済などが、真名序のみを残している。先行研究では、現存の真名序は後一条朝（一〇一六―一〇三六）以後に急速に数を増すと指摘されている[3]。また、真名序を集成した書である『扶桑古文集』と『本朝小序集』では、治暦年間（一〇六五―一〇六九）以降の作品が多数を占め、時代が下るにつれて真名序が盛んに作られるようになったことを示しているとされる[4]。このように、いわば和歌序の過渡期ともいえる時代に、慶滋為政が、他の和歌序の作者とは異なって、真名序と仮名序の両様の和歌序を残すことは、極めて珍しく、注目に値すると思われる。

（二）慶滋為政

慶滋為政は、一条朝から後一条朝にかけて、藤原道長とその子頼通と同じ時代に、漢学者、歌人として活躍した。生前の評価に比して、為政についての研究は乏しい。専論としては、杉崎重遠氏「善滋為政朝臣」（『勅撰集歌人伝の研究　王朝篇・巻一』東都書籍、一九四四年）が知られる程度である。氏は、為政の官歴をたどって、その事蹟を整理し、漢詩文や和歌などの作品を収集している。氏の明らかにされたところを、以下にまとめる。

慶滋為政は、生歿年未詳。加賀守賀茂忠行の孫、能登守保章の子。慶滋保胤の甥。保章の代より、慶滋（善滋）姓を名乗る。長徳四年（九九

八）、文章生の時、紀伝道の最終試験である方略試に及第。大外記、式部少輔、大内記などの文筆に優れた者が任じられる官職を歴任し、晩年は文章博士を本官とした。職掌として詔書などの漢文の文書を作成する他に、宮中や摂関家で催される宴集に召されて漢詩や詩序を、仏事の際には願文などを制作した。当代に為政が高く評価されたことは、治安、万寿、長元と、三度続いて、勘申した年号が採用された点にも現れている。歌人としても、一条朝の頃に成立した『拾遺和歌集』に一首入集するほか、後一条天皇大嘗会の主基方屏風歌を詠んでいる。

杉崎氏は、為政の真名序が制作された小一条院の遊覧については述べるものの、序は残されていないとしている。これは、真名序を収載する『扶桑古文集』が、一九六八年に翻刻して紹介される[5]まで、一般に知られなかったためである。為政の和歌序は、本稿で取り上げる真名序一篇と仮名序一篇の合わせて二篇が伝存している。為政の序に限らず、平安朝の和歌序の丁寧な読解は、なお多くがこれからのこととして残されている。本稿は、その一つの試みでもある。次章からは、制作された順に、真名序、つづいて仮名序について検討する。

二、小一条院（こいちじょういん）の大堰川遊覧

（一）小一条院と藤原道長

寛仁二年（一〇一八）九月十六日、小一条院が、平安京の西の郊外を流れる大堰川に遊び、藤原道長の桂の別荘に立ち寄った。遊覧の詳細は、道長の日記『御堂関白記』同日条[6]に詳しい。

十六日、乙亥、此日、院、野二望給嵯峨野及大堰河一、乗レ舟、上下有二管絃事一、為政朝臣献二和歌題一、紅葉浮レ水、即令三為政献二序題一、従レ舟下、至二桂家一給、此晩景也、皆乗馬、於二桂家一講二和歌一、経通朝臣奉二仕講師一、〈略〉、事了献二馬二疋一、還レ院給、給二余笙・笛等一、給二摂政剣一、各退出、

右によると、小一条院と道長らは大堰川で舟に乗り、管絃を奏した。また、慶滋為政が和歌の題「紅葉浮レ水」を献上し、序題（和歌序）も為政に奉らせることになった。その後、一行は、舟から下り馬に乗って、夕刻、道長が「桂の家」と呼ぶ別荘にたどり着いた。桂の家において、和歌序と和歌とが読み上げられ、その講師を藤原経通がつとめた。略した部分には、食事を供した様子と随行した人々の名が記される。その後、道長が院へ馬を献上し、院がお帰りになり、その後、院から返礼として道長には笙や笛が、摂政の頼通には剣が贈られたと記される。因みに、為政は、この後、九月二十四日の除目で、文章博士に任ぜられたと推定されている[7]。

大堰川は、桂川の部分名で、嵯峨や松尾辺りにおいて、このように呼ばれる。遊覧の舞台となった大堰川の周辺は、小倉山、嵐山などがあり、景勝地として知られた。平安朝においては、天皇や貴族がしばしば遊覧し、多くの漢詩文や和歌、和文が作られている。

遊覧の主賓であった、小一条院（九九四―一〇五一）は、敦明親王（あつあきら）[8]。三条天皇の第一皇子。母は、藤原済時の娘の皇后娍子。長和五年（一〇一六）、三条天皇が譲位し、後一条天皇が即位すると同時に、東宮（皇太子）となった。後一条天皇は、道長の娘の中宮彰子が生んだ一条天皇

の皇子である。この譲位に際して、道長は、東宮にも、彰子の生んだ敦良(あつなが)親王を立てようとしたが、三条天皇の強い意向で敦明親王が立てられた。そのため、道長は東宮に種々の圧迫を加え、翌寛仁元年（一〇一七）八月九日、敦明親王は東宮を辞した。同月二十五日、親王は、小一条院の院号を授けられ、準太上天皇となった。年官年爵封戸などは東宮の時と同じように遇されたという。

遊覧を主宰した、藤原道長（九六六―一〇二七）は、後一条天皇の即位によって摂政となったが、寛仁元年三月には、その座を長男の頼通に譲っている。また、同年十二月には、太政大臣となるが、同二年二月には太政大臣をも辞し、遊覧の際には散位であった。ただ、依然として、当代の実権を掌握していたとみられる。東宮を辞した小一条院に対しては、寛仁元年十一月に娘の寛子（母は源明子、十九歳）との結婚をすすめ、この遊覧の際にも丁重にもてなしている。このような道長について、『御堂関白記全註釈』に、「自らの権勢確立のため踏み台にしてきた人々を後には厚く遇するのが道長という人間であり、また深慮遠謀の政治家としての策でもあった(9)」と評するのが、当を得ているように思われる。

（二）慶滋為政の真名序

為政の和歌序は、応保二年（一一六二）の奥書を有し、鎌倉時代初期の書写とされる『扶桑古文集』に収載される(10)。句ごとに1から7の通し番号を附す。まず翻刻を示すが、漢字を通行の字体に改め、傍訓は元のまま掲げ、私に句読点と返り点を加えた。「○」は平声、「●」は仄声を示す。続く訓読文は私に作成し、上部の傍訓には必ずしも従わなかった。序の標題の上には、「小一条院」と小字の注記がある。

〈標題〉秋日、臨二大井河一紅葉泛レ水、応レ令歌一首〔幷レ序〕　為政

秋日、大井河に臨み「紅葉水に泛かぶ」、令に応(こた)ふる歌一首〔序を幷せたり〕

1兼秋九月者、風景可レ賞●、物華可翫●之候也。
2是以仙院、暫出二蓬丘(キウ)之暁雲○一、忽臨二桂河(ノ)之秋浪●一。
3備二其歓遊一者、前太相国幷摂籙内相府也。
　此外群卿仙客済々而扈従矣。
4始則艤(クチトテ)二舴艋(サクマウヲ)一而泝(クワリウニ)二迅瀬●一、糸竹緩(ユルク)調(フ)●、
　後亦櫳(クチトテ)二驊騮(クワリウニ)一而望二寒郊(カウ)○一、冠蓋相従(クワンカイアヒフ)○。
5便過二相国之別業一、不二亦美(マタヒナラ)一哉。
6彼水底(テイ)之無二纖塵○一、碧瑠璃(ヘキルリ)之光瑩(ミカキ)出(セリ)●、
　嶺面之経二寒雨●一、紅錦繡之色染成(セリ)○。
7故以二紅葉泛一レ水為レ題、
　便各献二和歌一。其詞云、

（訓読文）

1兼秋九月は、風景賞すべき、物華翫ぶべき候なり。
2是を以て仙院、暫く蓬丘の暁雲を出で、忽(たちま)ち桂河の秋浪に臨む。
3其の歓遊に備ふる者、前太相国幷びに摂籙(せつろく)内相府なり。
　此の外群卿仙客済々として扈従せり。
4始め則ち舴艋(さくまう)を艤(ふなよそひ)して迅瀬(じんらい)を泝(さかのぼ)り、糸竹緩く調ぶ、
　後に亦た驊騮(くわりう)に櫳(くちとり)て寒郊を望み、冠蓋(くわんがい)相ひ従ふ。
5便ち相国の別業に過(よ)ぎる、亦た美ならずや。

6彼の水底の繊塵無く、碧瑠璃の光瑩き出せり、
嶺面の寒雨を経て、紅錦繡の色染め成せり。
7故に「紅葉水に泛かぶ」を以て題と為し、
便ち各和歌を献ず。其の詞に云はく、

大意を記す。〈標題〉秋日、大井河に行って、「紅葉水に泛かぶ」の題で、仰せにこたえて詠んだ歌一首、並びに序。1秋三箇月のうち九月は、風景を褒めたたえて、風物の美しさを愛でる時期である。2それゆえに仙院（小一条院）は、少しの間、御所の暁の雲をお出ましになり、すぐに秋の浪たつ桂河に到着された。3その楽しい御遊をととのえたのは、先の太政大臣（道長）と摂政内大臣（頼通）である。このほかに、諸卿や殿上人が多く随行した。4はじめは小舟を出す準備をして流れの速い瀬をさかのぼり、管絃をゆるやかに奏で、続いてまた良馬に乗ってもの寂しい野原をながめ、大勢が付き従った。5まもなく太政大臣の別荘に立ち寄られたのも、誠によいことではないか。6かの水底はわずかな塵も無く、あおあおとした光をみがき出し、峰は冷たい雨を経て、紅の錦繡の色を染め成している。7それゆえ「紅葉水に泛かぶ」をもって題として、すぐさまおのおのに和歌を詠ませた、その和歌は次のとおりである。

標題の「応令」は、仰せにこたえる、ご命令に応じて和歌を詠むの意。太上天皇の宴集における序の標題は、通常は「応二太上天皇製一」（菅家文草・巻六443）、「応二太上皇製一」（菅家文草・巻六449）などとする。「応令」を用いるのは、皇太子の場合である。例えば、敦明親王の読書初めにおいて、大江匡衡が書いた詩序の標題には「冬日、陪二東宮一、聴三第一皇孫初読二御注孝経一、応レ令」（本朝文粋・巻九258）とある。この場合は、敦明親王の父、東宮居貞親王（三条天皇）のご命令に応じてという。先述のとおり、小一条院は、前年に、東宮を辞し、院号を授けられたという経緯がある。標題の「応令」には、小一条院の置かれた境遇が窺われる。

（三）為政の序の語釈

1「兼秋」は秋三箇月の意。「物華可レ翫」は、風物の輝くさまや美しさを愛でること。白居易「送三滕庶子致仕帰二婺州一」（白氏文集 2752）に、「春風秋月歌酒を携へ、八十年来物華を翫ぶ（春風秋月携歌酒、八十年来翫物華）」と、高齢の滕庶子が春風、秋月を歌や酒と共に楽しみ、八十年来、その気色を愛でてきたとあることが参考になる。2「仙院」は、一般には上皇のこと。ここでは、小一条院をさす。「蓬丘」は、蓬山、蓬壺と同じく、蓬莱山をいう。ここでは院の御所を蓬莱山に見立てる。菅原輔昭の詩序「春日、同賦二隔レ花遙勧一レ酒、応二太上皇製一」（本朝文粋・巻十298）に、「蓬壺の雲を踏むこと十日、夜飲既に酣なり（踏於蓬壺之雲十日、夜飲既酣）」と、上皇の御所を蓬壺という例がある。「仙客」は、仙人をいう。ここでは、公卿や殿上人をそれに擬す。『田氏家集』（巻上）の「聴二左将軍弾一レ琴」（25）では、「紫微の仙客雲空に住む、壁を隔てて琴を鳴らす半夜の風（紫微仙客住雲空、隔壁鳴琴半夜風）」と、内裏（紫微）で琴を弾じる左将軍と同室の人々を仙人に擬して用いる。「済々」は、人の多いさま。

4は、『御堂関白記』に「従レ舟下、至二桂家一給、此晩景也、皆乗馬」

ということに照応する。「舴艋」は、小舟のこと。「驊騮」は、良馬の名。「冠蓋」は、冠と車の覆い。ここは、遊覧に随行した人々をいう。5「別業」は、別荘。「不亦美哉」は、『後漢書』（朱楽何列伝第三十二）の朱穆「崇厚論」に「故に能く英声を百世に振ひ、不滅の遺風を播く、亦た美ならずや（故能振英声於百世、播不滅之遺風、不亦美哉）」と、（人の過失を補い助けたために）よい評判を百代の後まで伝え、永久に名誉を残したことは、誠によいことではないか、という例がある。小一条院が道長の別荘に立ち寄ったことを、過分とも思える表現で誉め称えたと考えられる。

序6には、歌題「紅葉水に泛かぶ」に関わる表現が見られる。「碧瑠璃」は、碧色の瑠璃のように水の青々として清らかなさまをいう。白居易「泛二太湖一書レ事寄二微之一」（2443）の「黄夾纈の林は寒くして葉有り、碧琉璃の水は浄くして風無し（黄夾纈林寒有葉、碧琉璃水浄無風）」は、黄色の絞り染めのような林は寒い中にあっても未だ葉が有り、碧色の瑠璃のような水は清らかで水面を波立たせる風も無いと、為政の序と同じく、紅葉した葉と碧瑠璃のような水とを対にする例である。「彼水底之無二纖塵一」は、宇多上皇の行幸で制作された紀貫之「大堰川行幸和歌序」の「ながるる水ぞ、そこににごれる塵なくて〔11〕」の部分を典故とすると考えられる。「嶺面」は、山の見えている側。「嶺背」の反対。長保五年（一〇〇三）の為政の詩句に「潭心に月映えて金波漲る、嶺面に雲開いて翠黛纎し（潭心月映金波漲、嶺面雲開翠黛纎）」（「晴後山川清」『類聚句題抄』340）と、潭心すなわち川の淵の中心と対にして用いられる。つまり、序6では、歌題とは異なり、水に泛かぶ紅葉ではなく、峰の紅葉を描いている。なお、紅葉を錦に譬える和歌は、萬葉集以来例があり、平安朝でも「霜のたて露のぬきこそよわからし山の錦の織ればかつ散る」（古今集・巻五秋下291・題しらず・藤原関雄）などと数多く詠まれている。また、雨が紅葉を染める表現も「君がさすみかさの山のもみぢ葉の色神無月しぐれの雨の染めるなりけり」（古今集・巻十九雑体・旋頭歌1010・題しらず・紀貫之）と和歌に見られる表現である。

以上のとおり、為政の序は、平安朝でたいへん好まれた白居易の詩句に見られる表現を多く用いている。また、難解な語は少なく、先行する和歌序や和歌の表現も取り入れている。遊覧に参加した人々には、目新しさはないものの、分かりやすく親しみやすい作品であったと思われる。また、行幸の主賓である小一条院の立場を考慮して、「仙院」や「蓬丘」といった上皇を表現する用語や、宇多上皇の元で作られた貫之の序を典故として用いている。その一方で、標題は「応令」として、序3に主宰者道長、頼通を登場させ、序5で道長の別荘を讃えることによって、主宰者への心遣いも怠ってはいない。為政の序は、小品ながら遊覧の一日の出来事を緻密にまとめて、表現の細部にまで気配りの行き届いた序であると言えよう。

（四）同日の和歌

小一条院の大堰川遊覧に随行した人々は、『御堂関白記』の先の引用で省略した箇所に次のように見える。

候人々摂政、中宮大夫、按察大納言、四条大納言、左大将、左衛門督、中宮権大夫、右衛門督、二位宰相、左大弁、修理大夫、右大弁、

侍従宰相等、

順に、藤原頼通、同道綱、同斉信、同公任、同教通、同頼宗、源経房、藤原実成、同兼隆、源道方、藤原通任、同朝経、同資平と推定されている(12)。これらの人々が、「紅葉水に泛かぶ」の題で詠んだと考えられる和歌は、管見では、三首、残っている。

『後拾遺和歌集』(巻二十雑六・誹諧歌)には、左衛門督藤原頼宗の和歌が収載されている。頼宗は、前年に院と結婚した寛子の同母の兄で、道長の次男である。

小一条院、入道前太政大臣の桂なるところにて歌よませたまひけるに紅葉をよみ侍ける　　堀川右大臣

1206 もみぢ葉は錦と見ゆと聞きしかど目もあやにこそ今日は散りぬれ

一首は、紅葉は錦のように見えると聞いていたが、錦ではなくて綾と見まごうほど、まばゆいばかりに今日は散っているよ、という意である。頼宗の家集『入道右大臣集』(新編私家集大成「頼宗」・底本は尊経閣文庫蔵本)の詞書は「小一条院、故殿、かつらに(ママ)とのにゐてたてまつりたまへりしに、紅葉」とある。「故殿」は道長、衍字がある箇所は「桂殿にゐて」か。人物と場所とは、序が書かれた遊覧と一致している。後拾遺集、家集が共に、「紅葉」とのみある点が気がかりではある(13)。しかし、題の「水に泛かぶ」という部分の要素は、「あや」に詠み込まれているのではないか。例えば、「水のあやに紅葉の錦かさねつつ河瀬に浪のたたぬ日ぞなき」(拾遺集・巻三秋197・大井河に紅葉の流るるを見て・健守法師)という歌があり、頼宗の歌も、水にうかぶ紅葉を錦か綾織物のように詠う点が眼目であったと思われる。為政の序6にも「紅錦繡」の語が見え、頼宗の歌は、この遊覧の際の歌である可能性が高い。

鎌倉中期の私撰集『万代和歌集』(巻五秋下)に、按察大納言藤原斉信の一首が見える。

小一条院大井河におはしまして侍りける時、紅葉浮水といふことを　　民部卿斉信

1251 秋深くなりゆく時は大堰川波の花さへ紅葉しにけり

なお、斉信が民部卿に任ぜられたのは遊覧の後、万寿五年(一〇二八)のことである。一首は、秋が深くなってゆく時は、大堰川の波の花までも紅く色づいてしまったことだ、と詠う。右の歌は、『新拾遺和歌集』(巻五秋下542)にも入集する。斉信の歌は、「草も木も色かはれどもわたつうみの浪の花にぞ秋なかりける」(古今集・巻五秋下250・是貞親王家の歌合の歌・文屋康秀)と、秋になっても波の白い花は色が変わらないと詠う歌をふまえている。斉信が、康秀の歌と逆に、その波の花でさえも色づくと詠うに際しては、「木の葉ちる浦に浪たつ秋なれば紅葉に花も咲きまがひけり」(後撰集・巻七秋下418・題しらず・藤原興風)と、紅葉が散る浦では波の花も紅葉に見間違うばかりに咲いているという歌を念頭においていると考えられる。

もう一首は、真観撰とされる『秋風和歌集』(巻六秋下)に見える。

小一条院大井河におはしまして、紅葉浮水といふことを人人よみはべりけるに　　治部卿経通

431 流れくる紅葉を見れば大井河秋こそ深く成りにけらしも

流れてくる紅葉を見ると大堰川も秋が深くなったことだなあ、と詠う。題を平易に詠む。作者の藤原経通は、先の『御堂関白記』によると、和歌を朗詠する講師をつとめている。右の歌は、『別本和漢兼作集』（40）にも収められる。斉信の歌とは、「秋深し」と詠う点が共通する。

以上、三首を見ると、題「紅葉水に泛かぶ」を、遊覧で目にした景色と捉えて、和歌に詠む点が共通している。頼宗の和歌は「今日」とあって、遊覧の日だからこそという祝意も詠んでいると考えられる。ただ、為政の序のように、小一条院や道長に対して特別に配慮した表現は見られないように思う。

三、高陽院行幸の後宴の和歌序

（一）高陽院行幸

続いて、為政の作った仮名序を見てゆく。万寿元年（一〇二四）九月、関白藤原頼通が、邸宅の高陽院において駒競を行い、後一条天皇の行幸があった。その有様は、『栄花物語』（巻二十三）「駒競の行幸の巻」や『小右記』などに詳しく記される。まず、同月十四日、天皇の母で、頼通の姉である太皇太后藤原彰子が高陽院に行啓した。十九日の駒競当日には、巳の刻（午前十時頃）に天皇が高陽院に行幸し、続いて東宮（皇太弟の敦良親王）も到着した。『栄花物語』によると、出家していた藤原道長は、馬場殿とされた東の対の北寄りの文殿に居て、僧を多く従えていたという。競馬は十番勝負で行われ、その後の饗宴や管絃などの催しが済んで天皇が内裏に戻ったのは、『小右記』によれば、丑一刻か子の終わり（午前一時頃）であった。

（二）慶滋為政の仮名序

翌日二十日には、さらに後宴が催された。頼通が彰子の元に参上し、催しを書き留めなければ残念だということで、慶滋為政が召された様子が、『栄花物語』に描かれている（14）。

夜更くるままに、月おもしろく曇りなくて照りわたりたるに、「昨日（の）事、ただ心地にのみ思ひて、書き留めずは、口惜しかるべし。為政ばかりぞ仕まつらん」と、殿仰せたびて、御前に召し出でて書かせ給へば、書き仕まつれり。

この時に、為政が書いた仮名序と和歌、頼通以下十六人の各一首ずつの和歌は、『栄花物語』および歌会資料「殿宴和歌」に残されている。また、仮名序を集成した書に、序のみが収載されているものがある。三原まきは氏は、これらの『栄花物語』、歌会資料、仮名序を集成した書の三系統の伝本を整理し、この序を検討する際は三系統の本文を比較すべきと述べている（15）。ここでは、氏の指摘に基づき、「殿宴和歌」の本文を底本とし、残る二系統それぞれを代表する伝本で校訂した本文を示す（16）。内容から①～③段に分け、対句に類する文ごとに区切って1～13の番号を附す。

〈標題〉高陽院殿にて、「岸の菊久しく薫ふ」といへる和歌の序　為政

①

1大中宮、
天下に三笠山といただかれ給（ひ）、

日本の帚木と立ち栄えおはしまし、
2 行く末も頼もしき事、大原の千年の松風の声吹（き）たつ、
朝夕に喜ばしき事、有栖川一たび澄める水の色のどけき世にし、
3 おぼえして政をつみ、おこなはせたまふ、左大臣、
妹背の山をへだてぬ御仲らひなり、

②

4 ここに百敷の東いくばくも去らざるほどに、古より優れたる所に、
5 新しく花の甍を造りつづけ、玉の台を磨きなして、
由ある草木を堀り植ゑ、角ある巌石を立て並べて、
6 万代を呼ばふべき山を畳み、四方の海を心に任せ給へる、
池の水をも御覧ぜさせ給はんと、
7 中宮、長月の十日四日、あからさまに渡らせ給ふゆゑに、
わが天皇も行幸せさせ給へる、
8 ひねもすに御遊びせさせ給ひて、明くる今日は心のどかに、
9 秋の空も曇りなく、夜半の月かげも隈なくて、
御前にあまたの上達部、雲の上人まゐり集ひたびて、
10 「岸の菊久しく薫ふ」といふ事を題にて、和歌を奉らしめ給（ふ）、

③

11 今日の有様を記さん、為政なめりと仰せ言ありけり、
12 詞の林も老木になりて、花の思ひを忘れにたり、
言の泉も浅くなりゆくに、人並ならぬ水屑を哀にきこしめして、
13 あらたまの年立ち返らん春の県召に漏らされず、
数へさせ給へと、爾申す

〈和歌〉緑なる松の齢を争ふは汀に薫ふ白菊の花

序の内容は、①で、後宴の主賓である彰子と主宰者である頼通とを誉め称え、二人が姉と弟であることに言及する。②では、高陽院の有様を述べ、後宴に至る経緯を記す。すなわち、彰子に引き続き、昨日は天皇が行幸されて終日催しがあり、その翌日である今日も公卿たちが集い「岸の菊久しく薫ふ」という題で、和歌を詠ませられたという。③では、為政の謙遜と国司への任官を請う言葉によって、序が結ばれている。行幸当時、為政の官職は、文章博士のみで兼官は無かったとされる。なお、①「世にし、おぼえして」の前後は意味が取りにくいが、三系統で本文が大きく異なる[17]ため、「殿宴和歌」のまま示した。また、「殿宴和歌」には、正治二年（一二〇〇）に藤原定家が書写した際の元奥書「……殿宴和歌幷序波、文生博士名誉之筆跡之序也、今日半日依有暇之、為後代令書写之了」がある。定家は、為政の序を名高い書きぶりの序であると評価し、後世に伝えるべき作品と考えていたことが分かる。

序に続いて詠まれる和歌は、序2に見える長寿を表す松と、題の菊とを合わせて、常緑の松と千年もの永遠の寿命を競うのは、池の汀に美しく咲きほこる白菊の花であると詠う。序①と照合すると、松を頼通に、菊を彰子に擬えていると考えられる。

（三）仮名序の文体・表現

為政の仮名序の文体は、紀貫之の創始した文体を継承している。貫之の文体については、小沢正夫氏[18]が、次の四点の特色を指摘する。第

一は「長歌の手法を学んでいる」。第二は「序詞・枕詞・懸け詞を和歌の修辞法から学んでいる」。第三に「漢文として四六文、中国文学のジャンルとして序の形式に学んでいる」。第四には「漢文訓読文の語彙・語法が混っている」。

為政の表現には、漢文の故事、訓読語が多く見られる。題の「岸の菊久しく薫ふ」は、『芸文類聚』「菊」などに見える、川岸の菊から滴り落ちる水を飲んだ者が長生きしたという甘谷の故事などをふまえて、時節と場所にふさわしい題として選ばれた題であろう。やや後の例と思われるが、『本朝続文粋』（巻十）の藤原国成の詩序の題「菊開水岸香」も似た趣向の題である。2「有栖川一たび澄める水の色*」は、『初学記』（巻六地部中・河第三・事対）などに引かれる、聖人が生まれる瑞祥として黄河が清むとある故事をふまえる。6「万代を呼ばふべき山を畳み」は、『漢書』（巻二十五上）などに見える、武帝が山で万歳を言う声を聞いたという故事をふまえていよう。これら二つの故事は、永観三年（九八五）二月十三日、円融院が紫野へ御幸された時に、平兼盛が献じた和歌序に「岸のくろ水色清う澄み、山の声高うよばふ」（兼盛集1・紫野の序）[19]と用いられている。

5「花の甍」「玉の台」は、それぞれ「華甍」「玉台」の訓読語である[20]。12「詞の林」「言の泉」は、先行する和歌真名序の漢語を訓読する。「詞の林」は、詩文の集まりを林に見立てた語で、「古今集真名序」の冒頭「夫和歌者、託二其根於心地一、発二其華於詞林一者也」と見える。「言の泉*」は、言葉がわき出ることを泉に喩えた語で、紀貫之「新撰和歌序」に、「潤二艶流於言泉一」とある。後藤昭雄氏は、「和歌真名序の措辞、用語は「古今集真名序」の圧倒的な影響のもとにある」とする。為政の序は、仮名序であるにも関わらず、「古今集真名序」の影響を受けているばかりか、「新撰和歌序」からも用語を摂取している。

四、おわりに―慶滋為政の和歌序の特質

以上見てきた和歌序二篇を比べて、先ず気づくことは、漢文と和文の差を超えて、同じような性質が見られることである。

一つ目の性質は、それぞれの和歌の題「紅葉水に泛かぶ」、「岸の菊久しく薫ふ」をふまえた表現をする箇所が少ないことである。紀貫之「大堰川行幸和歌序」や、村上朝から花山朝にかけて書かれた序の多くでは、当日の風景や歌会の模様が、歌題をふまえた表現で描写される。それらの序の構成は、当時の詩序の構成に倣っており、内容から見て三段に分けられる。第一段は歌会の概要、第二段は当日の風景や歌会の模様の描写、第三段は歌を披講する時の到来・作者の謙遜の辞などの結び、という内容を有する[21]。歌題がある場合、第二段で、歌題を敷衍した表現が用いられることになる。

為政の真名序は、1から3までで歌会の概要を述べ、4から6までが当日の風景・歌会の模様を描写し、7で歌題を記して結ばれている。このうち、6「彼の水底の繊塵無く、碧瑠璃の光瑩き出せり、嶺面の寒雨を経て、紅錦繡の色染め成せり」のみが、歌題に関わる箇所だが、先述のとおり、歌題とは異なって峰の紅葉を描く。また、仮名序は、6の高陽院の池を描写する箇所が題の「岸」に関わるものの、「菊」について

は、序では題を除いて登場していない。

歌題を敷衍しない代わりに、前代の和歌序と比べて増えているのは、歌会の主賓と主宰者についての描写である。これが二つ目の共通する性質と言えよう。前代までの序では、第一段で歌会の主宰者のみが描かれていた。例えば、平兼盛の序では、主宰者の円融院について「我君、昔ころ、民を恵み、国を治めおはしますこと数多うて」（紫野の序）と記す。これに対して、為政の真名序2では主賓の「仙院」小一条院のことを描き、3には「前太相国幷びに摂籙内相府」と遊覧の主宰者であった道長、頼通のことを述べる。仮名序でも同じように、冒頭に主賓の「大中宮」彰子が、3には主宰者の「左大臣」頼通が登場している。

このような主賓についての描写が増えた理由は、ひとまず、遊覧や歌会において、主宰者とは別に、主賓となる人物が登場するようになったからであろう。為政の序の場合は、天皇側が主賓、藤原氏の方が主宰者になっており、摂関期の政治形態が、歌会の在り方に投影されたかのように思われる。加えて、和歌序の執筆は、歌会の主宰者から依頼されたと考えられる。為政の仮名序は、『栄花物語』によると、頼通の命によって書かれている。執筆者としては、下命する主宰者に配慮せざるを得ないという事情があったのであろう。為政の真名序には、主賓の小一条院より、主宰者の道長の存在が鮮明に表されているように思われる。

また、為政の仮名序では、序の末尾の謙遜の辞が、任官を願う申文に近い、具体的な要望になっている。13「あらたまの年立ち返らん春の県召に漏らされず、数へさせ給へと、爾申す」と、翌年の春の地方官を任命する県召の除目において、新たな官職に任じてもらえるよう請うている。なお、為政は翌年に希望通り、河内守に任じられたようである。

前代までの序では、謙遜の辞は、貫之「大堰川行幸和歌序」に、「我らみじかき心の、このもかのもにまどひ、つたなきことの葉、吹風の空にみだれつつ」とあるように、作者が自らの不才を謙遜する内容が多く、為政の序のような書き方はなされていない。為政と同時代の詩序にも類似する例があり、為政のみの特徴とは言い難いものの、主賓と主宰者を取り上げる表現と同じく、摂関期を生きる官僚としての立場が、作品の表現をも方向づけるものであったことを窺わせる。

為政の二篇の序の相違点としては、仮名序に、歌会当日の風景や歌会の模様の描写が殆ど見られないことが挙げられる。歌会当日についての記述は、8の後半と9の「明くる今日は心のどかに、秋の空も曇りなく、夜半の月かげも隈なくて、御前にあまたの上達部、雲の上人まゐり集ひたびて」とある部分のみである。4から6では歌会の場所となった高陽院という場所を華麗な表現で描写する。7から8前半には、前日の駒競の経緯が記されている。これは、『栄花物語』に記される、「昨日（の）事、ただ心地にのみ思ひて、書き留めずは、口惜しかるべし」と、昨日のことを、ただ心に思っているだけで、書き留めなかったら、不本意であるという、主宰者頼通の要望に添うため、歌会の「昨日」のこと、すなわち駒競にいたる経緯が詳しく記されたのであろう。歌会自体も、あくまでも駒競の後宴という位置づけではあった。

ただし、貫之の「大堰川行幸和歌序」では、行幸が重陽の翌日であり、序でも「長月の九日と昨日いひて」というものの、行幸当日の様を中心に描写する。貞元二年（九七七）九月、曾禰好忠が、左大臣藤原頼忠

の前栽歌合の後に、日を改めて召された際には、和歌は前栽歌合の題に寄せて詠むが、序では召された当夜の様子を記している（十巻本歌合巻八・秋夜の序）。為政の序は、後宴当日の描写を欠く故に、和歌序の内容として期待される、歌会当日の模様が詳しく記されていない。歌会の模様を、歌題をふまえた表現で描き出すことによって生じる面白みも無いため、些か魅力に乏しいことは否めないと思う。

なぜ、為政は、この歌会では和文で序を書いたのであろうか。理由の一つは、この歌会が後宴であったためと考えられる。好忠の序の例によると、大きな宴のあとに催される後宴では、漢文より和文で序を書くことが好まれていたと推測される。好忠の例の前栽歌合当日には、菅原文時が真名序を書いている。今一つの理由は、主賓が彰子であったからと考えられる。女性が主宰する歌会で書かれた和歌序として、源順が貞元元年（九七六）に斎宮規子内親王の主宰する歌会で書いた序がある（順集163・野宮の序）。『紫式部日記』に記されるように、平安朝において女性は、表向き、漢籍の知識が無いものとされていた。これら二つの理由から、為政は、頼通に序を書くことを命じられた際、歌会の性格、主賓の性別に鑑みて、和文を選択したのだと考えられる。

以上、述べたところをまとめると、慶滋為政の和歌序の特質としては二つの点を指摘できると思う。まず、真名序と仮名序とが、漢文と和文の差を超えて、内容や表現が近似していることである。紀貫之の仮名序に窺われる日本語の散文を創造しようという自負や、村上朝の頃の仮名序の作者にあった和歌序は和文で書くという信念は、もはや見受けられない。為政の序のように、歌会の真名序と仮名序とが均質かつ同等のものとなった結果、敢えて漢文の四六文に倣った和文で、仮名序を書く意義は無くなったのだろう。後一条朝以後、和歌序を下命される文人は、書き慣れた漢文で真名序を作ることが多くなり、それが真名序の増えた理由の一つではないだろうか。

為政の序の、もう一つの特質は、下命する主宰者に配慮し、歌会の性格を慎重に判断して、作品の表現と、漢文、和文の選択がなされていることである。為政は、歌会における季節や景物よりも、人間模様の方を敏感に看取し、主宰者の意向を汲んで、精緻な美辞麗句によって歌会を賛美する序を書いたと言える。後世の読者からすると作品の魅力を減じたと思われる点もあるが、歌会の場において、和歌序と和歌とが読み上げられた際は、主宰者をはじめ当座の人々を満足させる作品であったのではないかと推測されるのである。

〈注〉

（1）『二〇一八年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書　日本文学を世界文学として読む』（大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター、二〇一九年三月）所収。

（2）拙稿「河原院の歌人達の和歌序―集成・校訂および特質・意義の考察―」（『人文研究』六九巻、二〇一八年三月）参照。

（3）大曽根章介氏「和歌序小考」（犬養廉氏編『古典和歌論叢』明治書院、一九八八年）参照。

（4）後藤昭雄氏「和歌真名序考」（同氏『平安朝漢文学史論考』所収、勉誠出版、二〇一二年。初出は、一九九〇年）参照。以下の後藤氏の説はすべてこれによる。

（5）「史料紹介『扶桑古文集』」（『東京大学史料編纂所報』二、一九六八年。『同』四、一九七〇年に正誤表を掲載）。

（6）東京大学史料編纂所編『御堂関白記　下』（大日本古記録、岩波書店）。私に返り点を加える。なお、その他の書の引用・作品番号については、次の本による。ただし、一部表記を改めたところがある。菅家文草・菅家後集は『菅家文草・菅家後集』（日本古典文学大系、岩波書店）による。白氏文集の本文は那波道円本、作品番号は花房英樹氏『白氏文集の批判的研究』（朋友書店）所収「綜合作品表」による。本朝文粋の本文は身延山久遠寺編『重要文化財　本朝文粋』（汲古書院）、作品番号は新日本古典文学大系による。田氏家集は『田氏家集注　巻之上』（和泉書院）による。『後漢書』（吉川忠夫氏訓注、岩波書店）。類聚句題抄は本間洋一氏『類聚句題抄全注釈』（和泉書院）。私家集を除く和歌は『新編国歌大観』（角川書店）、私家集の和歌は『新編私家集大成』（エムワイ企画）による。

（7）一、（二）杉崎論文参照。以下、為政の事蹟は同論文による。

（8）山中裕氏「敦明親王」（同氏『平安人物志』所収、東京大学出版会、一九七四年。初出は一九六五年）参照。

（9）山中裕氏編『御堂関白記全註釈　寛仁二年下』（高科書店、一九九一年）。

（10）『平安鎌倉記録典籍集』（東京大学史料編纂所影印叢書、八木書店、二〇〇七年）所収。『扶桑古文集』の本文は同書による。

（11）本文は、『古今著聞集』（永積安明・島田勇雄両氏校注『古今著聞集』（巻十四・遊覧第二十二479）日本古典文学大系、岩波書店、一九六六年）による。ただし、一部表記を改めたところがある。

（12）『大日本史料』（第二編之十三、一九〇一年）参照。ただし、同書では「中宮権大夫」を藤原能信とするが、注（9）『御堂関白記全註釈』において源経房と修正されたところに従う。

（13）犬養廉氏ほか『後拾遺和歌集新釈　下巻』（笠間書院、一九九七年）の「補説」に、寛仁二年九月十六日の『御堂関白記』を引き「当該歌はこの時の詠の可能性もあろうか」とする。

（14）『栄花物語』の本文は、川口久雄氏解説『梅沢本　栄花物語』（全六冊の第四冊、影印、勉誠社、一九八〇年）による。

（15）三原まきは氏「「高陽院行幸和歌」の基礎的研究―歌会資料と『栄花物語』―」（『学習院大学人文科学論集』十号、二〇〇一年九月）参照。

（16）本文の底本には、国立歴史民俗博物館蔵『殿宴和歌』（高松宮家旧蔵）の影印を用いる。なお、注（15）三原論文に同本の翻刻が、『新編国歌大観』巻五「万寿元年高陽院行幸和歌」に同本を底本として校訂された本文が収められる。本文は、稿者の判断により、清濁を分かち、読点を附す。仮名を漢字に改める場合は、元の仮名を振り仮名として残す。仮名遣いは歴史的仮名遣いに改め、当て字は仮名または通行の字に改めるが、元の仮名・当て字は右傍に記す。送り仮名を補う場合は、（　）に入れる。本文を改める箇所には、＊印を附す。なお、〈内〉内閣文庫蔵『和歌序集』（特55-23、画像、国立公文書館デジタルアーカイブ）、〈栄〉川口久雄氏解説『梅沢本　栄花物語』（注14）の二本などにより校訂した。校訂箇所は次の通り。「有栖川（＊ありすがは）」は、底本「ありしか」を、内・栄により改める。「色（＊）」は、底本「水のゝとけき」を、内「水の色のとけき」により改める。「巌（＊いはほ）」は、底本になし、栄により加える。「十日四日（＊とうかよか）」は、底本「とうかようか」を、新編日本古典文学全集『栄花物語』頭注に引かれる富岡本「とうかよか」によって改める。「あからさまに（＊）」は、底本「あかしさまに」を、栄により改める。「ゆゑに（＊）」は、底本「ゆふへに」を、栄「ゆへに」により改める。「言（＊ことば）」は、底本「こゝろ」を、内・栄により改める。

（17）内「のとけき君かよにおはしくにのまつりことをおこなひたまふ」、栄「のとけきよにおほくのまつり事をすへおこなはせたまふ」。

（18）小沢正夫氏『古代歌学の形成』（塙書房、一九六三年）第一編第二章「仮名序」。

（19）引用は、新編私家集大成「兼盛Ⅰ」（底本：宮内庁書陵部蔵五〇六・八「兼盛集」）による。なお、注（2）拙稿参照。以下の村上朝から花山朝の序の略称もこれによる。

（20）山中裕氏ほか校注・訳『栄花物語②』（新編日本古典文学全集、小学館、一九九七年）の頭注に指摘される。

（21）ここでいう段とは、序の内容の一区切りの意で、序を分析する目安とするものである。段落とは異なる。佐藤道生氏「詩序と句題詩」（同氏『平安後期日本漢文学の研究』所収、笠間書院、二〇〇三年。初出は一九九八年）参照。

【Abstract】

The Prefaces of *Waka* Poetry by Yoshishige-no-Tamemasa：
Characteristics of the *Waka* Poetry Prefaces
in the Regency Government Period

YAMAMOTO Mayuko

Yoshishige no Tamemasa was a literary bureaucrat active at the height of the regency period. This paper will analyze the Chinese and Japanese waka poetry prefaces written by Tamemasa and highlight their distinctive characteristics.

One distinctive feature of Tamemasa's prefaces is that the Chinese and Japanese prefaces are extremely similar to each other. Another is the consideration for the chairman at the gathering who requested the prefaces and introduced major restrictions in terms of the expressions used in the works that follow, as well as the selection of Chinese or Japanese language.

『今鏡』と『大鏡』の皇妃描写
―「帝王の寵妃」という人物描写について―

小笠原愛子

『今鏡』の帝紀では、皇位継承に影響を及ぼす重要な后妃達が、夫帝（院）の寵妃であったと語られている。『今鏡』は、彼女らの重要な地位を、夫帝の寵愛を語ることで説明しようとしているのだが、これは『今鏡』が踏襲した『大鏡』には見られない人物描写であり、『今鏡』が語る院政期の皇嗣決定の在り方の反映である。

一、はじめに

一―（一）、『今鏡』と『大鏡』

本論は、院政期を主な叙述対象とする歴史物語である『今鏡』について、その后妃描写の特徴と意図を、『大鏡』と比較することでより明確に示そうとするものである。『大鏡』は「入道殿下（＝藤原道長：引用者註）の御栄え」（二一）[1] つまり藤原道長の栄華を語る歴史物語であり、『今鏡』はその『大鏡』の「後のこと」（上一六）[2] を語る続編である。『今鏡』は、『大鏡』の続編であることをその序に明言しており、形式等枠組みの点では『大鏡』を踏襲する意識が非常に強い一方、人物描写や取り上げる話題等の叙述内容には、『大鏡』とは大きく印象を異にするところが多い。本稿で取り上げる后妃描写もその一つで、『今鏡』の后妃記事は、その配置においても、叙述内容においても、『大鏡』とは大きく異なっている。その相違は、『大鏡』が語る摂関期と『今鏡』が語る院政期の違いの反映であり、また両書の歴史認識の反映でもある。

一―（二）、摂関期と院政期

現在、一般に使われている「摂関期」と「院政期」という時代区分について確認しておきたい。これらはいずれも「摂関政治」「院政」と呼ばれる政治の形態が見られたことによる呼称である。ただし、「摂関政治」「院政」はともに当時の諸々の事象・経過によって生起・定着した政治形態であって、正式の制度として定められたものではなく、それゆえ明確にその始点と終点を定めがたい。

本稿で『大鏡』と『今鏡』について考察する上で特に重要なのは、摂関期の終点及び院政期の始点である。現在一般的には、摂関家を外戚としない後三条天皇即位によって摂関期が終焉を迎えたとみなされてい

る。『今鏡』においても後三条帝代は画期とされているが、それがどのような意識による時代区分であるのかを明確にするため、天皇の血筋だけでなく「摂関政治」「院政」という政治の在り方から論じた先学の論を確認しておきたい。

「摂関政治」とは、藤原氏出身の摂政または関白の主導による政治であり(3)、「院政」とは院の主導による政治である。ここでいう「政治」が主に何を意味するかについて、河内祥輔氏は、次代の天皇を決定することこそが当時の「政治」であったと述べられ、宇多院も院政を布いたと見なし得ると論じられた(4)。また伴瀬明美氏は、皇嗣及び皇嗣を産む女性の選択権・決定権が、摂関に掌握されていたのが摂関期であり、院に掌握されていたのが院政期であると論じられた(5)。

一―(三)、『今鏡』の時代区分

『今鏡』の帝紀「すべらぎ」は、上中下の三巻に分けられており、この巻分けは『今鏡』の時代区分を反映している(6)。『今鏡』帝紀は、後三条帝紀のうち、即位以前を語る「司召」章を「すべらぎ」上巻巻末に、後三条天皇即位以降を語る「手向」章を中巻巻頭に置いている。しかも中巻巻頭に置かれた「手向」章の冒頭は、「この帝世をしらせ給ひて後、世の中みな治まりて、今に至るまでそのなごりになむ侍りける」(上一二四)というもので、後三条天皇即位が時代の画期であり、「今にいたるまで」続く時代の始まりであるとみなされていることが、配置と叙述内容の双方から明白である。また、次代白河天皇の帝紀には「先(=先代後三条帝代:引用者注)の御なごりにて、一の人(=摂関:引用者注)のわがままに行なひ給ふもおはせねば」(上一四七)とあり、後三条帝即位によって摂関政治の時代が終わったという歴史観が明言されている。

上巻巻末に置かれた後三条帝紀「司召」章の最初の話題は、尊仁親王(後の後三条天皇)立坊の経緯である。ここでは、死の床にある父帝後朱雀天皇が、功臣能信の機転によって頼通の抑圧に抗し二宮尊仁親王を東宮に立てる様が、緊迫した会話文を直接引用することによって活写されている。そのような場面描写はこれ以前の章には見られず、加納重文氏は、「(『今鏡』における)逸話としては実質的に最初に登場するもの」「今鏡作者にとって、実質的に最初の物語」であると述べて、この皇嗣決定のエピソードの重要性を指摘された(7)。上記に加え、この逸話は、その出色の描写のみならず配置においても注目すべきものである。『今鏡』の帝紀は、父帝の名→母后の名→生誕→親王宣下→立太子→即位という順で経歴を列挙した後に、具体的なエピソードを置くという一定の形式を順守する意識が極めて強いのだが、この立坊のエピソードは例外的に後三条天皇の経歴を語り終わるより前に、経歴の途中に挿入される形で置かれている。『今鏡』は、後三条天皇を摂関期と院政期を画する天皇として位置付ける上で、摂関の意に反して天皇となったという経歴に極めて大きな意味を認めているのである。

二、『今鏡』の母后

二―(一)、美福門院の重要性

『今鏡』が皇嗣決定の在り方を重要視していることは、本書の各所に見出せる。『今鏡』は『大鏡』に比して、皇妃、とりわけ母后に関する記事が多く、特に帝紀の末尾には必ず母后の伝を付している。『今鏡』は皇妃を重要視しているといえるのだが、それが帝紀に語られているからには、帝位に関わる重要性を認められていると考えるべきであろう。

本節で取り上げる近衛天皇の母后美福門院得子は『今鏡』中で最も記述量の多い人物で、彼女の重要性はその点のみからも明らかである。得子所生近衛天皇の帝紀は、その二章全体を通して母后得子の事蹟を語ることに終始しており、近衛帝紀というよりも得子伝の如き様相を呈している。一見奇妙なこの現象は、『今鏡』が、近衛天皇という天皇の存在を説明するためには母院得子を語る必要があると考えたことの表れである。

二―（二）、美福門院に関する叙述

近衛帝紀は「男山」「虫の音」の二章で、この二章は『今鏡』の帝紀としても比較的長文である。帝紀下巻巻頭に置かれた「男山」章は、母院得子が父院鳥羽に入侍したことから語りはじめられており、帝紀冒頭に天皇の父母の名と経歴を列挙してから具体的なエピソードを語るという形式を持つ『今鏡』の中では、特異な形の帝紀であるといえる。

〈「男山」冒頭〉

鳥羽の帝、位の御時より参り給へりし后（＝待賢門院璋子）は、みこたちあまた生み奉りて、（鳥羽帝が）位下りさせ給ひしかば、女院と申しておはしましき。法皇（＝白河上皇）の養ひ奉りてかしづき給ひしに、法皇おはしまさで後、宇治の后（＝高陽院泰子）参り給ひて、御方々いどましげなれども、院（＝鳥羽院）はいづかたにもうときやうにてのみおはしましに、忍びて参り給へる御方（＝得子）おはして、いづこにも離れ給はず。やや朝政事もなかるべし。いとやむごとなき際にはあらねど、中納言にて御親はおはしけるに、母北の方は、源氏の堀河の大臣の御女におはしける上に、類ひなくかしづききこえて、ただ人にはえ許さじともてあつかひてなむ。

（上二七〇）

傍線部は『源氏物語』の引用で、得子は桐壺更衣に重ねられ、鳥羽院が他の上位の后達をさしおいて専ら得子を寵愛したことが印象づけられている。得子が甚だしく寵愛されたことを述べるために『源氏物語』を引用して桐壺更衣に重ね合わせるという描写は、この後も繰り返されている。

章名の「男山」は、鳥羽院が得子の皇子出産を祈らせた際の願文の文句である。ここで、鳥羽院は得子寵愛故に、得子の皇子出産とその皇子の即位を望んだと語られている。非公式に入侍した女房に過ぎなかった得子が、女御から皇后へ、そして最終的には母后女院にまで上ったのは、全て彼女を寵愛した鳥羽院の意思によるものとされているのである。

近衛帝紀の後半である「虫の音」章はその冒頭で近衛天皇の崩御を語った後も、得子の事蹟を語り続ける。ここでも、鳥羽院が「女院（＝得子）の御ことのいたはしさ」（上二八八）つまり得子の地位の安定に配慮して次帝を選定したことや、鳥羽院自身の崩御に際しても、所領その

他を得子に帰せしめるべく遺言したこと等が語られている。そして、得子の往生を以て近衛帝紀が語り納められるのである。

近衛帝紀は、そのほぼ全文を通じて得子の半生、それも彼女が夫院鳥羽の寵愛によって母后女院となったことを語っているのであり、近衛天皇よりも得子と鳥羽院について語ることの方が多い一方で、鳥羽帝紀には得子寵愛は語られていない。この配置が意味することは、鳥羽院による得子寵愛は、鳥羽院ではなく近衛天皇にとって重要な意味を持っていたということである。

二―（三）、『今鏡』における帝王の寵妃

得子同様に、桐壺更衣に重ねられることで夫帝の寵妃であったことを印象づけられている母后に、堀河帝母（白河中宮）賢子がいる。堀河帝紀二章のうち、後半の「所々の御寺」章は、母后賢子を語る章である

賢子は夫帝白河天皇の在位中に薨じており、その際の白河天皇の嘆きの甚だしさを、『源氏物語』「桐壺」巻を引用しながら語るのが「所々の御寺」章である。章名「所々の御寺」も、白河天皇による賢子追善のための造寺を指している。堀河帝紀でありながら、堀河天皇ではなく母后賢子と父帝白河天皇の関係を語っている点や、白河帝紀における賢子への言及は一文の簡潔な記述のみである点など、先に見た近衛帝紀における得子記事と同様の特徴を指摘することができる。

近衛帝代が鳥羽院政下であり、近衛天皇が鳥羽院によって選ばれた帝であったの同じく、堀河帝代は白河院政下であり、堀河天皇は白河院によって選ばれた帝であった。近衛帝紀に、母后得子への治天鳥羽院の寵愛が語られ、堀河帝紀に、母后賢子への治天白河院の寵愛が語られているのは、近衛天皇を帝たらしめたのが鳥羽院の意思であり、堀河天皇を帝たらしめたのが白河院の意思であったことを示すためであろう。

「帝王の寵愛」が帝意を意味するという叙述の様式は、治天君の妻后以外の立場であった后妃にも指摘できる。待賢門院璋子は、所生崇徳天皇の帝紀に養父白河院鍾愛の養女であったと語られているが、それは崇徳帝代が白河院政下であり、崇徳天皇が白河院によって即位した帝だったからである。璋子にはいま一人の所生天皇である後白河天皇があるが、後白河帝紀における璋子への言及は名を挙げるのみの簡略なものである。二代の帝母となった后妃を帝紀に語る際には、後代の方の帝紀末尾に母后伝が置かれるのが『大鏡』『今鏡』共通の原則であるにもかかわらず、璋子伝がその原則に反して先代の崇徳帝紀に語られているのは、崇徳天皇即位には母后璋子を通じて治天白河院の意思が大きく反映されていた一方、後白河天皇の即位には白河院の意思は関わっていないからである。

三、『大鏡』の母后

三―（一）、中后安子の重要性

母后を語ることの少ない『大鏡』において、一人際だって長文の記事を持つ皇妃が、「中后」安子である。村上天皇の中宮であり、冷泉・円融天皇の母后であった彼女は、摂関家の権勢掌握に極めて大きく貢献し、道長へと続く九条流の摂関継承を確実なものとした存在として重要視さ

れている。

『大鏡』における安子の重要性が、摂関家にとっての重要性であったことを反映し、長大な安子記事の大半は帝紀ではなく藤氏伝で語られている。彼女の父である九条殿師輔の伝は、最初に師輔の経歴を列挙した後には「第一の御女、……」（一四八）と話題を安子に移して、彼女の夫帝村上天皇への影響力や彼女の人柄を示す具体的エピソードを語り始めており、師輔伝でありながら、師輔よりも安子を語ることに多くの紙幅を費やしている。そして、安子が后として理想的な人物であったことを述べた後を、次に引く一文で締めくくっている。

冷泉院・円融院・為平式部卿宮と、女宮四人との御母后にて、またならびなくおはしましき。帝・春宮と申し、代々の関白・摂政と申すも、多くは、ただこの九条殿の御一筋なり。（一五三）

師輔流の栄華は安子あってこそのものであると明言されているのである。

三―（二）、安子に関する叙述

安子が『大鏡』に語られたエピソードは、以下に挙げるものである。

①選子内親王出産の産褥に薨じた際の、夫帝村上帝の甚だしい嘆き。（円融帝紀後半）

②村上天皇に対しても嫉妬をあらわにし、深夜に渡御があった際にも応じなかったこと。

③村上天皇の殊寵を被った小一条女御芳子の美貌を見て嫉妬し、土器の破片を投げつけたこと。

④安子が芳子に土器を投げつけたことに怒った村上天皇が安子の兄弟達を謹慎させると、安子は強引に村上天皇を呼びつけ、兄弟達の謹慎を説かせたこと。

⑤安子は本来の性質が寛容で、上に立つ者としての人徳を備え、夫帝の善政を扶けたので、夫帝は彼女を相談相手として頼りにしており、彼女が薨じた際には「田舎世界まで」（一五二）の人民が嘆いたこと。

①のみが帝紀に語られたもので、それ以外の②～⑤はすべて安子の父である九条殿師輔の伝に語られている。いずれも夫帝村上天皇との関係、とくに夫帝への安子の影響力を語るものだが、それらは村上天皇ではなく九条殿師輔、あるいは九条家にとっての重要な意味を有しているのである。

『大鏡』に語られた安子と夫帝村上天皇との関係は緊密で、しかもその夫婦関係は、摂関家の栄華という『大鏡』の主題を語る上で極めて重要な意義を有している。しかし彼女は「ときめ」いた、つまり夫帝から寵愛されたとは語られない。安子記事に先立って述べられる村上天皇後宮における安子の人物像は、次に引くようなものである。

第一の御女、村上の先帝の御時の女御、多くの女御・御息所のなかに、すぐれてめでたくおはしましき。帝も、この女御殿にはいみじう怖ぢ申させたまひ、ありがたきことをも、奏せさせたまふことをば、いなびさせたまふべくもあらざりけり。

（一四八）

「すぐれてめでたく」、また夫帝村上天皇が「よろづの政をば聞こえさせ合はせてせさせ」（一五二）た后であった安子への、夫帝の感情は、「いみじく怖ぢ」というものであったという。『今鏡』の重要な后達が治天君からの寵愛を印象付けられていたこととは、大きく異なる人物描写である。

三―（三）、宣耀殿女御芳子

『大鏡』において夫帝の寵妃であったと語られているのは、村上天皇の宣耀殿女御、小一条殿師尹女芳子である。

師尹伝では、「（村上天皇が芳子を）いとかしこくときめかさせたまひて」（一一八）とその殊寵を述べ、村上天皇と芳子の贈答歌や、『古今和歌集』を暗誦していた芳子を村上天皇が試問したこと、村上天皇が芳子に対して直々に筝を伝授したこと等を語っている。しかし、寵愛の篤さを語る具体的エピソードを締めくくるのは、芳子が決して安子には及ばないことを示す村上天皇の言葉である。

……かぎりなくときめきたまふに、冷泉院の御母后（＝安子）うせたまひてこそ、なかなかこよなくおぼえ劣りたまへりとは聞こえたまひしか。（村上天皇が）「故宮（＝安子）の、いみじうめざましく、やすからぬものに思したりしかば、思ひ出づるに、いとほしく、悔しきなり」とぞ仰せられける。

（一一九）

『大鏡』は、「かぎりなくときめ」いていた芳子への寵愛が安子の薨後には却って衰えたと述べ、しかもその理由が「安子が気の毒だから」であると村上帝の口から語らせている。ここでは、芳子を甚だしく寵愛した村上天皇にとってすら、芳子よりも安子の方が大切であったと明示されているのである。

この後には、芳子所生の皇子が「御心きはめたる痴れ者」（一一九）であったことが述べられ、芳子の兄弟の失態や小一条流の凋落が語られていく。芳子がどれほど寵愛されようとも、彼女は安子にかなうべくもないし、芳子の実家である小一条家も栄えることはない。

四、おわりに

『今鏡』は、帝位に影響を与えた重要な后達を夫帝の寵妃として描写したが、その『今鏡』が踏襲した『大鏡』では、寧ろ重要な后妃が寵妃として語られることはなかった。両書の人物描写に認められるそのような相違は、院政期と摂関期の違いを的確に反映している。『今鏡』に特徴的な皇妃像は、同書の、時代認識に即した人物描写であるといえよう。

〈注〉

（1）本稿における『大鏡』引用は、新編日本古典文学全集『大鏡』（橘健二・加藤静子　校注　一九九六年　小学館）により、頁数を付す。なお、私に傍線・注記を加え、表記を改めたところがある。

（2）本稿における『今鏡』引用は、『今鏡全釈』上下（海野泰男　訳注　一九八二年三月・

一九八三年七月　福武書店）により、巻号と頁数を付す。なお、私に傍線・注記を加え、表記を改めたところがある。

（3）『国史大辞典』（一九七九年～一九九三年　吉川弘文館）及び『平安時代史事典』（一九九四年　古代学協会・古代学研究所）による。

（4）『古代政治史における天皇制の論理』〈増訂版〉（二〇一四年一〇月　吉川弘文館）

（5）「院政期における後宮の変化とその意義」（『日本史研究』四〇二　一九九六年二月）

（6）拙稿「帝紀及び列伝に見る『今鏡』の時代区分意識」（『大阪夕陽丘学園短期大学紀要』六一　二〇一八年一二月）に論じた。

（7）加納重文氏『歴史物語の思想』（一九九二年一二月　京都女子大学）

【Abstract】

Differences between depictions of the Empress in the *Imakagami* and the *Ōkagami*

OGASAWARA Aiko

In the imperial genealogy of the *Imakagami*, many cases are narrated of empresses having prominent positions and influencing succession. Those empresses were considered as having been the favored mistresses of the former Emperor. Although the *Imakagami* explains the importance of their position in terms of the former Emperor's favor, this portrayal cannot be found in the *Ōkagami*, a work that the *Imakagami* followed. This shows that it is a reflection of the cloistered government period described in the *Imakagami*.

◎ 鈴木 重周　（すずき・しげちか）

◎現職：成城大学グローカル研究センターPD 研究員、UCRC 研究員

◎専門：フランス文学、地域研究

◎業績：共著に、『混沌の共和国―「文明化の使命」の時代における渡世のディスクール』（柳沢史明・江島泰子・吉澤英樹編、ナカニシヤ出版、2019 年 2 月／担当「第 3 章・郷愁と愛国心―レオン・カーアン『ユダヤの生活』にみる第三共和政期のユダヤ系フランス人」103-126 頁）。論文に、「フランスにおける「ユダヤ文学」―ジッドの『日記』を手がかりとして」（『フランス語フランス文学研究』第 112－113 号、2018 年 8 月、353-368 頁）、「ドレフュス事件期の反ユダヤ主義とジャーナリズム―ナントの日刊紙『ロワールの灯台』をめぐって」（『関東支部論集』日本フランス語フランス文学会、第 25 号、2016 年 12 月、83-96 頁）などがある。

◎ 永冨 真梨　（ながどみ・まり）

◎現職：同志社大学、摂南大学非常勤講師、UCRC研究員

◎専門：アメリカ研究、音楽学

◎業績：主な学術論文に「日中戦争開始前後の日本における周縁的男性像--灰田勝彦のカウボーイソング〈いとしの黒馬よ〉を例として」（『戦争社会学研究』第３巻、2019 年 6 月、179-198 頁）、”Proletariats or Merchants of Death?: Transnational Cowboys and the Crisis of Japanese Communists’ Masculinities in the Early 1960s,”『同志社アメリカ研究』第 55 号、31-55 頁、共著に、『ポップミュージックを語る 10 の視点』（大和田俊之編、アルテスパブリッシング、2020 年 2 月／担当「第９章・カントリー音楽研究の新潮流」273-303 頁）などがある。

◎ 嵜本 圭子　（さきもと・けいこ）

◎現職：大阪市立大学大学院前期博士課程 2 年、UCRC 特別研究員

◎専門：文化資源学、観光学

◎実績：「中崎町の変遷と地域の人々の取り組み―「大阪の記憶」研究ノート」（UCRC 報告書、2018 年）がある。

◎ 堀 まどか　（ほり・まどか）

◎大阪市立大学大学院文学研究科・准教授

◎国際日本研究、比較文化学

◎業績：著書に『「二重国籍」詩人・野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012 年）、共著に『ハンドブック　日本近代文学研究の方法』ひつじ書房、2016 年／担当「比較文学」）、論文に「「特攻隊」とメディア・リテラシー：韓国の日本語教育の現場より」（『世界の日本研究―国際的視野からの日本研究』国際日本文化研究センター編、2017 年）などがある。

【執筆者プロフィール】

◎ 山本　真由子（やまもと・まゆこ）

◎大阪市立大学大学院文学研究科・准教授、UCRC運営委員

◎専門：平安朝文学（特に漢詩文と和歌）

◎業績：論文に「源道済の詠紅葉蘆花の和歌と序をめぐって」（『国語国文』第 86 巻第４号、2017 年）、「三条左大臣殿前栽歌合について―「遣水虫の宴」の趣向―」（『文学史研究』第 57 号、2017 年）などがある。

◎ 小笠原 愛子（おがさわら・あいこ）

◎現職：大阪市立大学都市文化研究センター研究員、国立和歌山工業高等専門学校非常勤講師、大阪夕陽丘学園高等学校非常勤講師

◎専門分野：中古の仮名散文（歴史物語）

◎業績：論文に「月の賀歌が言祝ぐ栄え ―『今鏡』彰子伝と『大鏡』穏子記事」（『大阪夕陽丘学園短期大学紀要』(62) 2019年12月、1-10）、「帝紀及び列伝に見る『今鏡』の時代区分意識」（『大阪夕陽丘学園短期大学紀要』（61）2018年12月、1-11）、「『今鏡』における天皇及び母后の崩御記事」（『大阪夕陽丘学園短期大学紀要』(60) 2017年12月 1-11）などがある。

◎ 永井 泉　（ながい・いずみ）

◎現職：大阪市立大学大学院後期博士課程、UCRC 特別研究員

◎専門分野：近代の詩歌（特に短歌、童謡）

◎業績：論文に「片山廣子の初期短歌におけるクリスティーナ・ロセッティ受容―『蜜蜂』にみられる『ゴブリン・マーケット』の影響を中心に―」（『比較文学』第62号、2020年）、「『コドモノクニ』における北原白秋と幼児の詩―作品と選評を読む―」（『児童文学研究』第52号、2020年）などがある。

◎ 草生 久嗣　（くさぶ・ひさつぐ）

◎ 大阪市立大学大学院文学研究科・教授、UCRC所長

◎ 専門：西洋史学・ビザンツ史

◎ 業績：共著に『詳説世界史研究』（山川出版社、2018年／担当「東ヨーロッパ世界の成立」165-171頁）、論文に「越境する知をささえるもの―ビザンツの情報集積」（『中央評論』第266号、2010年、56-61頁）、「「ビザンツ」帝国の「ローマ人」:アイデンティティの射程（特集 中世のなかのローマ)」（『西洋中世研究』7号、2015年、5-24頁）などがある。

第一回目の7月、前年度の「日本文学を世界文学として読む」の研究会に参加していただいたイリノイ大学のロバート・ティアニー教授をお招きして、アメリカにおける日本研究の現状と方法、そして翻訳についてのご講演と本研究についてのご指導をいただいた。昨年度の議論のテーマであった世界文学と日本文学の意味と実践を改めて考え直し、この課題を継続して、さらに深化させようとする地点から、本プロジェクトは始動した。ティアニー先生のご講義をうけて、国際的な比較文学研究や海外における日本文学研究の動向を学び、また、新しいメンバーを迎えて、互いの研究の方法や実践、現在の学術的な悩みなどを披露することから、議論がはじまった。第2回の10月末の研究会では、英国での大学・大学院教育を受け、翻訳を通して文学や文化商品の開発の現場で活躍してきたSOASで教える片岡真伊先生をお招きし、異なる文化圏のなかでのイメージを変換・転換させる上の意義と方法、歴史的なものを記述することの意義について、メンバーと話し合った。第3回の12月末の研究会では、概念研究について、国内外で外国人研究者たちとの連携協力のなかで長年実践してこられた国際日本文化研究センター・鈴木貞美名誉教授をお招きして、「文化史の再建から文学史の再編」の注意点と課題について御講義いただいた。講師とともに、メンバーの報告研究や方法論の開拓を考えるための議論をおこなった。第4回目は、とりまとめの研究会としてシンポジウムの形式でメンバーが研究発表をおこなった。専門研究分野が異なるメンバー同士が、どのような共通テーマで今後の共同研究を進めることができるのかについて、話し合う機会をもった。想定していたよりも課題に共通項があり、相互に刺激があった。一年を通して、若手の研究者たちは、非常勤職やその他の職務で多忙を極めており、参加や日程調整に苦労している様子も見受けられた。しかし、学術領域を横断して学術的な繋がりをもち、グローバル展開を探り、研究発表や論文執筆の機会をもちたいという意欲と願いは強いものがあることは、痛感した。本研究会をつづける意義はあったと実感し、今年度、学びの場や議論の場、領域横断的な人的な相互コネクションを深めたことは、ひとつの実績であると考えている。さらなる学術成果、大阪市立大学およびUCRCの多彩な学術人材をいかした国際的な学術発信については、今後の課題として期待される。

さいごになるが、本プロジェクト研究は、前年度の山本真由子先生のご経験の確実な実績におおいに学ばせていただいて、成り立っていた。この報告書の作成には、執筆者・非執筆者すべてのメンバーの協力がなくしては完成できなかった。とりわけ、山本真由子先生には、多大なご尽力をいただいた。さらに、1年を通して、UCRCの運営委員や事務局のかたがたには、大いにお世話になったことを記して、こころより御礼申し上げたい。　　（文責・堀）

第４回定例研究会

日時／令和二(2020)年2月18日(火)

◆シンポジウム（午前／午後）

「摂関期の和歌序について」
山本真由子（OCU 文・准教授／国語国文学・中古文学）

「近代日本文学におけるフェアリーの受容：イメージと翻訳」（仮）
永井泉（UCRC 特別研究員／本学大学院・国語国文学専修）

「世界史叙述メディアの新地平――学習歴史漫画を超えて」
草生久嗣（OCU 文・教授／西洋史学）

「ドレフュス事件からみる「ユダヤ」と「文学」」
鈴木重周（成城大学グローカル研究センターPD／UCRC 研究員）

「世紀末フランスと女優の下克上――サラ・ベルナール研究から」
白田由樹（OCU 文・准教授／フランス語圏言語文化学）

「『今鏡』と『大鏡』における后妃描写の比較」（仮）」
小笠原愛子（UCRC 研究員／国語国文学・中古文学）

◆総合討論および総括

第３回定例研究会

日時／2019 年12月26日(木)

◆講演「日本文化史の再建から文学史の再編へ―――概念の重要性」

講師：鈴木貞美 先生（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学名誉教授）

◆研究会（シンポジウム）

「アテナイの「過去」を書き換える――『アッティカ誌』(*Atthis*) の成立と受容」
竹内一博（UCRC 研究員／神戸大学非常勤講師）

「日中における『聊斎志異』「画皮」の受容と変遷――近代の妖怪学の隆盛から現代まで」
杜一葦（OCU 大学院文学研究院アジア都市文化学専攻）

「文学研究から文化研究へ――作品の読み方から考える「日本」社会の特性」
堀まどか（OCU 文化構想学部アジア文化コース准教授）

◆総合討論

第２回定例研究会

日時／令和２(2019)年10月30日(水)

◆講演「書き換えられた「エピローグ」― 大岡昇平『野火』の英訳現場から」

講師：片岡　真伊　（ロンドン大学 SOAS）

◆研究会（シンポジウム）

「日本における西部劇イメージから記述する貫戦史：カウボーイ、カウガールを事例として」　永冨真梨　（UCRC研究員／同志社大学、摂南大学非常勤講師）

「大阪市中心地域における訪日外国人観光客に対する地域の人たちの取り組み」
嵜本圭子（UCRC 特別研究員／本学大学院・アジア都市文化学専攻）

◆総合討論

【研究会報告】

文学研究科プロジェクト

「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」

（「日本文学を世界文学として読む」第2弾）

第１回定例研究会

日時／令和元(2019)年7月23日(火)

◆講演「翻訳と文学研究：アメリカにおける日本研究の現状と方法」

講師：ロバート・ティアニー教授　（イリノイ州立大学アーバナシャンペーン校、東アジア言語文化および世界比較文学科）

◆総合討論

重いと思ったが、次第に面白くなった。

以上のような感想は、まさに「文化構想学」のめざしている目標を示唆していると思います。つまり、「他者との共感を通した相互理解を促進し、「共生的社会の基礎」を形づくるための、さまざまな知見や歴史意識を培い、社会の未来を作るために何が必要かを学生が主体的に考え始めていると感じます。また、「サハリン」という地にまつわる記憶という、従来の学問分野からはこぼれ落ちてしまいがちであった「文化的事象」をテーマにして、現代社会の課題にもつながる文化を理解しようとしているともいえるでしょう。そして、このような学びの積み重ねは、現代社会が抱える諸問題の解決に取り組み、二十一世紀型の成熟社会を文化の面から担う人材の育成につながっていくのではないか、と期待するところです。

４　おわりに

今回のプロジェクト「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」（「日本文学を世界文学として読む」第二弾）は、「文学」のもつ特質を意識的に把握しながら、そして文化認識や歴史観の同時代的な現象を問題にする立場を投影しながら、「文学」を中核にした研究や教育の可能性を考えてみることを目指したものでした。文学研究の従来の学術方法やジャンル意識を超えて、未来にむけて発信することを考えるとき、そして、国際的に展開していくための方法を考えるとき、「文学研究」は「文化研究」に近づいていくのではないか、と私は考えます。とくにあちこちで多文化社会が拡大している現在、「文学」研究の捉えるべき射程や方法は、越境する複数領域の学問ジャンルと融合しており、その重要性が増しています。

私の研究は、「文学研究」なのか、「文化研究」なのか、立ち位置や所属する学術ジャンルがあいまいに見えるかもしれません。私自身は、自分の専門を「国際日本研究」と説明するようにしていますが、これもわかりにくいかもしれません。ただ、簡単にいうと、私自身が文化や歴史を考えるときに大切にしたいのは、「人間」という個々人のレベルにまで視点を落として考えて眺めたい、ということです。人物研究や人間の記憶や体験に関する理解が、国境や文化の枠組を越えて共感や理解を得る「鍵」になるのかも知れないと考えています。文学というものは、人間の記憶や人間の生き方に一番近いところに位置しているのだろうと思います。人々の生きている記憶、たぐりよせる記憶、過去から現在にまで繋がる時間のなかで響いてくる記憶、そして、国民国家の集団的記憶にも関わり、思考方法や倫理観や文化意識にまで影響を与えている記憶。このような、すべての記憶を表象しうる「文学」は、まさに文化研究につながっているものであり、もっと大きくいえば、文化研究や人文学研究の可能性を拓いていくと考えます。

2019 年秋に「日本事情１B」のクラスで、「サハリン」「人の移動」というテーマで講義をし、講義のあとには学生同士が議論しあう時間を設けたときの期末の感想になります。)「サハリン」という地域について学ぶなかから、「国境を考える、人の移動を考える」というテーマのなかから、どのような問題意識を得たのでしょうか。

学生感想①　国境とは国と国の間にある線は、世界地図みたいに目で見えるものだけではないことを学んだ。文化や言語、志向の他に人種という観点からも国境があることを理解した。人種といっても、ひとくくりにすることが出来ず、土地や国籍、結婚、家庭、性別といった線引きによって、さらに人々の国境が生まれている。

学生感想②　もともとの生まれは朝鮮とはいえサハリンで育ちながら、現在の家族を置いてまで母国に帰りたいと願うのか、理解できなかった。(自分は、引っ越しや留学の経験がなく、自分の故郷へ帰りたいという感情になったことがないので、) なぜ故郷にこだわるのか、事情を調べ考察した。調べるうちに、「外国人」として扱われるという苦悩を抱える人がいることが分かった。これは現在にも繋がる問題である。さまざまな国のルーツをもつ人々はこれからどのように共存していけば良いのか、考えている。

学生感想③　国境紛争の課題について、この授業で調べるまでは対立している事実しか知らず、何故対立しているのか、どのような点で争っているのか、全く知らなかった。対立しているという点で見ると、両国とも自分の国の主張が正しいと思うだろうが、争点などを整理して客観的に考えて見るとそうでもないかもしれない。ただ、基本的な情報しか報道しないから、公平性を保つのが難しい。各国の対立とは、それぞれの立場両方の意見を取り込み、その上で自分の主観を交えずに客観的に判断しないと、どちらに正当性があるのかは見えてこないと分かった。

学生感想④　「異文化の受容能力」は、戦後の日本教育の賜物とも考えられる。(世代によっては、まだ「異文化の受容」が課題であるかもしれないが、討議の結果、若い世代は異文化受容を当然視していると分かった。) 現段階で必要とされる、日本の国際化教育は「異文化の受容」ではなく、「自国の文化理解を深めること」である。自分の文化や自国への無関心さが問題である。

学生感想⑤　「平和とは何か、どう定義するか」ということを話し合ったとき、外国人留学生が「差別のない状態」だと言い、自分には思いつかない考えだった。人とこのような話題について話し合ったりするのは、最初は気が

（サハリン南部の港・コルサコフは 1790 年に松前藩によって交易所が開かれる。1875 年に日露間で結ばれた樺太千島交換条約によって、樺太全体がロシア領になりコルサコフとなる。日露戦争後にサハリンの南半分が日本領になり、大泊と改称。稚内を結ぶ連絡船が発着するようになった。（敗戦時、引揚者はこの港をめざし、難民キャンプで引き揚げ船を待った。）

i～j　ロシア我が歴史博物館（豊原／ユジノサハリンスク）のジオラマ展示

（占守島（Shumshu）上陸の様子や、50 度線での日本軍との戦闘の様子が等身大ジオラマで展示され、学芸員による解説ツアーが毎回行われている。）

本稿では、授業の内容や、そこで扱った文学作品の比較や内容分析については取りあげません。ただ一点、ここに付記しておきたいのは、文学作品を読むということで、また新しい観点から、サハリンの戦前戦後の記憶をリアルに感じることが出来ること。それに加えて、戦後の日本社会の特徴を考えることにも繋がるということです。たとえば、サハリンの記憶をテーマにした作品として、吉田知子の「豊原」や李恢成の「砧を打つ女」があります[2]。両作品とも、同世代の作家で、1944 年から 1947 年頃までのサハリンを舞台にした作品を書き、同じく 1970 年代初頭の時期に、日本社会のなかで読者を獲得して、一時代と社会状況を反映しているといえます。どちらの作品も、少年の視点から母を語る物語であり、外地で少年期を過ごした記憶と引揚げ体験を描きます。この二作品を授業のなかで取り上げたとき、ある中国人留学生は、どちらの作品にも強く共感できると述べて、「少年不識愁滋味」という宋代の詩を思い出した、と感想をしみじみと述べていました。

本稿では、文学からみるサハリン社会と戦後日本の「文化的ダイナミズム」の事例を述べることは省略しますが、ここでは、学生たちの授業の感想に注目してみたいと思います。学生たちはどのようなことを考えたのでしょうか。（これは、

---

[2] 吉田知子（1934～）は、父の転勤により、満洲をへて1944年に樺太に移り、終戦を迎え、ソ連の空襲を体験、1947年3月に引き揚げた作家。小説「豊原」は1967年に発表され、『無明長夜』（1970年新潮社/芥川賞受賞）に収録されている。2019年12月27日に静岡でインタビューをおこなった際、吉田氏は「たくさんの小説を書いたので詳細を忘れてしまっている作品があるが、小説「豊原」はとくに好きな作品で、思い入れが強い」と語っている。一方、李恢成（1935～）は、樺太で生まれ、吉田と同じく1947年に朝鮮人としてサハリンから日本に引き揚げている。早稲田大学のロシア文学科を卒業後、朝鮮総連に就職し、サハリンを舞台とした小説「砧をうつ女」で1972年に芥川賞を受賞。在日朝鮮人作家として、日本語で書き、日本社会のなかで評価され、広く読まれてきた。「豊原」と「砧をうつ女」は、ともに少年の視点から母を描く物語だが、民族や国を背負うことの重みも、外地に暮らすことの意味も、対照的だといって良い。描かれる母の生き様や性格は全く違い、夫婦関係・親子関係・親類関係の違いも、ケンカの仕方も、戦時期のとらえ方も、非常に異なる。しかし、どちらも読者の心を打つ。サハリンというひとつの土地の記憶を描写するひとつひとつを文学作品のなかで読み解いていくことは、戦前の樺太（サハリン）を考えることだけではなく、戦後の日本社会のなかのさまざまな人間生活のダイバーシティを読み解くことにも繋がっていく。

の戦争記念館では、占守島上陸作戦がノルマンディー上陸作戦のように、民を救う英雄として、ジオラマ化されて展示されています。戦争シーンのジオラマは、日本の平和記念館や歴史博物館ではあまり目にしません。平和教育の課題点も考えることになります。）また、サハリンに残る製紙工場の廃墟や神社の跡地についても思いを馳せ、「ダークツーリズム」や「負の遺産」について考える機会をもちました。以下は、サハリンでのフィールド調査（2019 年九 9 月 14―19 日）のなかで撮影した写真です。現地報告を兼ねて、いくつか写真を紹介します。

a

b

c

d

a　サハリン州立郷土博物館（日本時代の樺太庁博物館（1937 年 8 月開館）の建物と展示物の一部を受け継いだもの）

b　樺太時代の奉安殿（サハリン州立郷土博物館の敷地内に移築されたもの）

c　日本人が住んでいた樺太時代の歴史に関する展示。

d　この地域の先住民であるアイヌやニブフの民俗学的資料。

e

f

g

e～g　サハリン州立郷土博物館（2019 年 9 月 14 日撮影）での、サハリン在住朝鮮民族に関する展示のオープニング。（サハリン島には多くの朝鮮系ロシア人が居住しているが、その歴史や文化についての展示が州立郷土博物館に無いことは問題ではないかという観点から、2019 年 9 月 14 日から地下のホールで初の特別展示が開催された。そのオープニングセレモニーには、朝鮮系ロシア人たちの子供たちの踊りが披露された。（写真 g）

h

i

j

h　日本兵に殺害されたことを記す朝鮮人被害者の碑（大泊／コルサコフ）

記憶と文学から学生たちがどのようなことを考えたか、について紹介します。

日本は島国であり、陸地のなかに国境線がひかれるという状況は、現在の日本国内のなかにはないのですが、戦前には、日本の領地のなかに国境線がありました。樺太（＝現在のサハリン）です。日露戦争後のポーツマス講和条約で、南樺太が割譲されます。つまり 1905 年から、1945 年までの 40 年間、北緯 50 度線以南の樺太が日本領でした。この、《ポーツマス講和条約で、南樺太が割譲される》という歴史的事実については、歴史の授業で学んだはずで、暗記させられた事項かもしれません。しかし、その事実にどのくらいリアリティを感じて認識しているでしょうか。現在の若い世代の日本人にとって（北海道や東北などサハリンが身近な地域に住んでいる場合や、自分の祖先がサハリンにゆかりのある場合などを除けば）、「樺太」という地名には、ほとんど実感が伴わないのが現状ではないでしょうか。

いったいどんな島で、どんな人びとで構成されているのか、いかなる歴史を持っているのか、また、どんな産業がさかんで、どんな天然資源がある／あったのでしょうか。[1]「境界」を考えるという視点から、どのようにサハリンの歴史と社会について学ぶことができるでしょうか。たとえば、サハリンに暮らす朝鮮系ロシア人（あるいは無国籍人）の歴史と経緯を知ることは、「人びとの移動」の歴史と現在の社会形成を考えることでもあります。現在の朝鮮系ロシア人に対する、研究者たちによる区分けには、どのようなものがあるのでしょう。それは当然ながら、戦争やポストコロニアルの問題と深く関わっており、現在サハリンのあちこちに建立されている朝鮮人慰霊碑や日本人が引き起こした虐殺事件などの民族間摩擦の悲劇についても再考することになります。戦後の日本人の引揚げの主なものは、1947 年 7 月に終了しますが、しかし朝鮮人は引揚げの対象から外されて、樺太在住となったものも多く、朝鮮人と結婚していた日本人女性たちも、そこに残った者が多数います。現在のサハリン残留朝鮮人、そして残された日本人妻が生まれることとなった歴史的な経緯を知ることになります。

ソ連が対日宣戦布告を行ったのが 1945 年 8 月 8 日で、広島の原爆投下の後であったことは日本の歴史のなかでは良く知られている事実です。ただし、翌日から日ソ国境付近で戦闘が始まり、ソ連軍の南下や空爆、ソ連軍が 8 月 18 日に千島列島北端の占守島（Shumshu）に上陸して日本兵と激戦を繰り広げたことにはあまり実感が伴いません。沖縄戦やヒロシマについては多くを学びますが、北方で 1945 年に何が起こっていたかは、あまり学ぶ機会がないでしょう。（ロシア

[1] もともとアイヌやいくつかの先住民族が住んでいた島だが、1905 年に正式に南樺太が日本の領土になり、1910 年の時点で、樺太の人口の 90%を日本人が占めた。水産資源が豊かで、1910 年代後半から森林資源開発が進んで製紙・パルプ工業の島として発展してゆき、日本人移住者の生活基盤がつくられていき、さらに 1920 年代には石炭業がひらかれ、より多くの労働力が必要となり、朝鮮半島などの外地からも樺太に人が流れ込んでいく。現在においても、石油や天然ガスも産出する資源豊かな島であるが、国家の収益となるため、一般の生活は素朴である。

本の「文学」のもつ可能性と独自性を文化の面から考えてみたい、それは「世界文学」のなかで注目されうるもの、そこから日本文化の特徴をあぶり出せるもの、という気持ちが強まりました。現在は、日本を中心とした「帰還／引揚げ」や「亡命／難民」の問題とその記憶を問い直すという点に大きな関心をもっています。いうまでもないことですが、日本語はかつて「世界語」「帝国語」であった時代があり、「日本人」以外の人々にも共有され使用されてきました。それを意識する場合、最近では「日本語文学」「日本語圏文学」という言い方がされるようになっています。そのような移動の歴史や移動する人間の記憶から、一国文学史観を超えたアジア全体での共感やリアリティを共有できる日本の近現代文学の歴史を考えて見ることを試みてみたいのです。（あるいは共有できないかもしれませんが、もし共有できないとすれば、どこに課題があるのかを考えながら、日本語文学の問い直しを課題にしたいと思っています。）

３．「文化構想学」科における教育活動をかんがえる

さて、このような私の研究や専門を、どのように教育活動に活かしていけるのでしょうか。大阪市立大学の 2019 年 4 月新設「文化構想学」科の新学科特設サイトには、**「文化を学び、現在を問い、社会のこれからを作る人になる」**という目標が掲げられています。

- 文化は創造力や感性を育むことで豊かな人間性を涵養するとともに、来たるべき社会の新たな価値を創出し、他者との共感を通した相互理解を促進することで、共生的社会の基礎を形作ります。
- 文化構想学科は、従来の学問分野からはこぼれ落ちてしまいがちな文化的事象をも積極的に考察対象とすることで、現代社会で必要とされる文化への深い理解を養います。
- また、そうした深い知見に根ざしつつ、多様な文化的事象を社会のなかで積極的に活用することで、現代社会が抱える諸問題の解決に取り組み、21 世紀型成熟社会を文化の面から担う人材を育てます。

（「文化構想学とは」（大阪市立大学ＨＰ） https://www.lit.osaka-cu.ac.jp/cm/ （2018/9/1）

このような目標のために、つまり、未来志向の「東アジア」のあり方を考える実践的な「文化構想学」の教育のなかで、いったいどんなことが考えられるでしょうか。試行錯誤の最中なのですが、「文学研究」から「文化研究」へというテーマは、現在の私の関わる教育活動の基軸になっているとつねに感じています。

一例として、2019 年度の秋に授業のなかで扱った「サハリン」という場所の

このような「文化研究」をおこなうときには、注意するべき二つの点があると思っています。ひとつは、対象とする文化事象の時代性が考慮されなければならないということ。それぞれの事象に、伝承、伝播、創造があり、そこの歴史をたどる必要があります。つまり、概念史への眼差しといってもよいかもしれません。何が、いつ、何に対して、言われているのかに注意深く迫り、文化を形成する個々の基礎概念の形成過程を意識しておくことが重要です。もうひとつは、「文化」という言葉の背後にある「国家」を意識しておくということです。何かの「文化」が強調されるとき、そこには民族主義やナショナリズムが見え隠れすることを念頭に置くべきであろうと思います。

基本的には、私の関心は、文化形成が、人と人との会話と同様に一方通行ではなく、インタラクティブに進んでいるということであり、各国ごとに行われる文化研究の国境を越えて、学術領域の境界をうちやぶって、多様な文化接触の連鎖や、文化交渉の歴史の過程を明らかにしたいと考えています。そのためにも、この二つの注意点は大事だと考えています。

さて、もともとの私自身の興味のあり方が人間の移動とその記憶であり、とくにアイデンティティの問題でありましたので、最近は、**C) 戦前戦後の日本語文学の研究**を自分の研究の今後との柱のひとつと考えています。これは、私の研究のなかでは、国民国家の集団的記憶、「居心地の悪さ」を考える研究でもあり、文学作品を素材にしながらも、より文化研究へ向かっている自覚があります。じつは、もともと野口米次郎の研究を始めた端緒は、アメリカへの初期日本人移民と、1900 年代の渡米奨励論、女性向け渡米奨励論、政治家たちの殖民論のズレに関心をもったことでした。そこで野口米次郎という詩人に出逢って、彼の再評価に挑戦することを試みてきたのです。しかし「境界者」をテーマにする場合、アジアも視野にもいれなければ、近現代の「日本」の実像は語れないと感じていました。野口米次郎の伝記『「二重国籍」詩人 野口米次郎』を書いた後、二年半ほど韓国で日本語・日本文化について教える機会を得ました。

韓国の教育現場では、自分が知らず知らずに持っていた文化や認識を新しい形で突きつけられることの連続で、学問上のジャンル意識が完全に崩壊しました。学問領域や専門性という意識を離れて、ひろく「文化」を考えていきたいと思うようになりました。これは以前に事例をあげて書いたことがあるのですが、ひとつの作品の読み方には、ある文化圏のなかで独自に共有される方法や法則があって一概に「共感」を誘えるわけではない場合があります。また、そのような法則に縛られない「共有」「共感」を生む場合もあります。どういうときに、それが起こるのか。ある文化圏内には、読み方の癖や法則、文脈のとりかたや、その理解の背景となる標準的規範があり、それは美意識や詩学や宗教観にも繋がっていくことです。文学の成立、文学の作られ方、文学の読まれ方などを意識していく場合、それは「文化」研究のほうに近づきます。

海外で教えたことで、私にとって学問上の境界は完全に融解したのですが、日

争責任」という評価の轍が長くつづいていたため、ということになるでしょう。野口米次郎は、日本の詩歌の特徴を「沈黙の美学」として説明し、自分でも英詩を書いたのですが、その言論は、詩や俳句の解説だけでなく、能楽、茶道、日本の美術などにも関わっています。従来の研究では、彼の日本文壇における貢献や日本語での活動についてはほとんど研究がありませんでした。また日中戦争勃発時にインドのノーベル文学賞作家・タゴールと論争になったということは「知る人ぞ知る」事実でしたが、タゴール以外のインドとの関わりや、野口の戦争詩や戦時協力にいたる中身（公的な活動の表面や、個人的な葛藤と挫折の表現）については明らかにされないままでした。これらを現在の視点から見直してみることは、過去の歴史を学ぶことだけではなく、じつは、現在を理解し再考してみることにも繋がります。

私が試行錯誤の研究過程でつねに意識していたのは、二つの座標軸を見失わないようにすること。ひとつは、詩学の文化伝統に目配せする日本文化研究や日本文学研究の側からの縦軸のアプローチで、もうひとつが、象徴主義やモダニズムなどの国際的同時性に着目する横軸です。この詩人に限ったことではないのですが、ひとりの人間の「生」は、とくに「境界者」といえるような人物の足跡をたどるためには、こういった幾つかの座標軸を考える必要があると思います。つまり、野口米次郎というひとりの詩人の人生を追いかけるためには、日本文学・英文学といった個々の学問領域を超えて、文化全般、さらには思想全般の国際的、国内的な動向とを関連づけて考察する立場が必須となり、学芸ジャンルの領域を横断する視点が、必要不可欠になっていました。

現在は、野口米次郎だけに関心があるのではなく、野口米次郎の周辺の人物や、また、野口のように「境界性」を意識した人間、移動する人間の生活と意識に、全般的に関心があります。

私の研究の二つめの柱としては、**B）文化・芸術・文学の理解をふかめる文化研究**ということがあります。どのように国外発信され、それがまた国内で再構築され、「伝統」の再生産・創造がおきるのか、という文化形成に関する研究です。さきほど触れました野口米次郎という詩人は、詩作にとどまることなく、日本美術や浮世絵、能・狂言の海外への紹介者としても国際的に活躍していて、彼の人生を追おうとすれば、その仕事が海外のジャポニスムにどのように働きかけ、どのような役割を担ったのかについて考察を試みることと不可欠でした。そのため、詩人の研究をする試みは、文化研究や文化交流史のほうに近づきます。たとえば、野口米次郎による能の紹介は、それまでの外国人紹介者と比較してどのように異なる要素があったのか。野口米次郎はモダニズム芸術の観点やモダニスト演出家たちの言論を意識して、能を紹介していますが、その中身がどのようなものなのか、といったことです。このような、能に関する野口の著作を検討していくと、そのすべてが彼の詩人としての詩学の実践であり、かつ国際的モダニズム芸術の志向性と密接に関連していたことがわかりました。

です。

大阪市立大学文学部に新設された文化構想学のなかで、私の所属する「アジア文化コース」で掲げている学びのキーワードは、「地域」「共生」「比較」であり、**「アジアの文化的ダイナミズム」**というテーマに迫ることになっています。そこでは、日本を含めたアジアに対する深い理解と共感、現代の文化状況への鋭い感性、文化にアプローチするための専門的知識を養うことをうたっています。所属する教員それぞれが、さまざまな方法でこのテーマについての研究・教育を行っているのですが、私自身は、日本社会を国際的な観点からを眺めるという点で研究・教育活動をおこなっています。とくに**「人の移動」と「境界」を考える**ということを自分の核となるテーマとして位置づけています。

本稿では、私のこれまでの研究を振り返り、現在の研究について概略を示し、文化構想学科の教育のなかでの今後の方向性をかんがえてみたいと思います。

２．これまでの研究、これからの研究

私自身の研究は、おおきく次のような三つの柱に区分できます。

A)　境界者・移動する人間の理解と再評価

B)　文化・芸術・文学の理解をふかめる文化研究

C)　戦前戦後の日本語文学の研究

私が大切にしたいのは、「Border」（境界／周縁）からの視点や視角を意識することで、いままで見えていた自分の世界観に変化が起こせるのではないか、ということです。

まず、**A）境界者・移動する人間の理解と再評価**ですが、私がライフワークとして研究しているのが、バイリンガル詩人・野口米次郎で、おもにその研究を軸に、彼の周辺の文化人や詩人たちに注目してきました。野口米次郎は、日本語と英語で執筆して、２０世紀初頭には英語圏でも日本文壇でも名を知られていた国際派詩人です。このような人物を扱うためには、「一国文学史」観ではない国際的視野を意識しなければならず、また個々の流派の文学史観から文芸・文化の全体像を見わたす必要がありました。さらに、この人物を探ることが、近代の国際的な潮流の中に内在した「近代」を乗り越える価値創造（地域に根ざす伝統・文化の再発見、古典評価など）の過程を、考えることにも繋がりました。

どうして20世紀転換期にアジアの片隅にすぎない日本の一若者の英詩が、アメリカやイギリスで評価され得たのか、どうして現在では批判されて忘却されているのか、といったごくシンプルな問いから、この人物の研究が始まりました。結論からいうと、まず、東西の詩学が融合して刺激し合った時代、それぞれの地域文化のなかの神秘主義の精神世界が注目されていた時代に、野口米次郎のような東洋からの詩人が注目されたということ。そして、敗戦直後の「文学者の戦

「文学研究」から「文化研究」へ

---「文化構想学」科における教育・研究へ向けて---

堀　まどか

(要旨)
「文学研究」から「文化研究」へ移行してきた自分自身のこれまでの研究過程をふりかえり、現在の関心や最近の調査などを含めた研究や専門性を「文化構想学」の教育目標のなかでどのように実践的に展開したいのか、学生たちの感想を紹介しながら、展望を記した。

１．はじめに

文学研究が捉えるべき射程を、どう設定するべきでしょうか。じつは文学こそ、民族や国家の集団全体に関わる思考法や倫理観、そして歴史的記憶を作り出してきた装置であったともいえます。そのように考える場合、文学研究は文化研究にかぎりなく近づいています。(ここでいう文化研究は、「カルチュラルスタディーズ」(Cultural Studies)という学問ジャンルを指すというよりは、文化の研究という意味です。)

「文学」を文学研究だけで考えることは出来ません。それは、「歴史」を歴史学研究の枠組内だけで考えることができないということと同様です。というのは、歴史とか文学という概念自体に、理論的な混沌と変革の枝葉が内在しているからです。もちろん、歴史的推論には、証拠や論拠が当然ながら必要です。ただ、歴史学者の考えるような実証性や記録の痕跡を離れて、人のさまざまな「記憶」や「口承」あるいは「伝説」のなかにも「歴史」があると考えることもできます。ある地域に生きる人びとが想像／創造した共通の「記憶」が、広い意味での「歴史」と考えることも可能なのです。「文学」のもつ力や、「文学」が果たしている役割とは、そのようなものと重なるところが少なくありません。

近年、「世界文学」ということばをよく耳にするようになりました。これは近年に始まった概念ではないのですが、ひとつの言語で編まれた文学が、以前よりも増して、さまざまな国々や多彩な言語文化圏で読まれるようになってきており、世界文学の観点や方法がますます強調されてきているのです。日本の文学のありかたも、その読まれ方も、かつて想定されてきたよりもさらに拡大した枠組のなかで問い直されようとしている時期にあると思います。アジア全体をより強く意識した観点から、新構築するべき時期にきているといえます。日本文学は、かねてより世界の文学のなかで一定の人気を保ってきましたが、近年ではさらに、世界文学のなかでの観点や方法、アジアのなかでの位相が注目されているの

理思想』18 号 pp.27-40
西村幸夫編著(2006)『路地からのまちづくり』 学芸出版社
西村幸夫 (2009)『観光まちづくり まち自慢からはじまる地域マネジメント』 学芸出版社
西村幸夫(2017)『まちを読み解く―景観・歴史・地域づくり―』 朝倉書店
橋爪紳也編(2004)『大阪 新・長屋暮らしのすすめ』 太洋社
前田陽子・瀬田史彦(2012)「中崎地区における新しい店舗と既存コミュニティの関係に関する一考察－長屋再生型店舗の集積形成プロセスと地元住民の関係性に着目して」『公益社団法人日本都市計画学会 都市計画論文集』vol.47 No3 pp.559-564
脇田祥尚(2011)「コンバージョンによる長屋と路地の空間更新 中崎町界隈(大阪市北区)を事例として」『日本建築学会計画論文集」第 76 巻 第 660 号 pp.28
7-294

参考資料

『大阪人』vol.60 2006 年 12 月号 財団法人大阪都市協会
大阪市立済美小学校(1966)『大阪市立済美小学校 創立 50 周年記念誌』創立 50 周年記念事業委員会
大阪市立済美小学校(1976)『大阪市立済美小学校 創立 60 周年記念誌』大阪市立済美小学校創立 60 周年記念誌編集委員会
大阪市立済美小学校(1986)『大阪市立済美小学校 創立 80 周年記念誌』大阪市立済美小学校創立 80 周年記念事業委員会
済美地域社会福祉協議会(2018)『済美ふるさとプラン～やっぱり済美がいいな…をめざして～』 大阪市北区役所 社会福祉法人 大阪市北区社会福祉協議会
済美連合振興町会編(2016)『済美の人 街なみ 暮らし OLD & NEW』 済美連合振興町会

（日本語訳）
中崎町の路地は住民が暮らす所なので最大限の配慮が必要である。
中崎町は観光地である前に、人が暮らす住宅路地である。
だからなのか、路地ごとに人は多いが、静かな雰囲気である。
https://limsee.com/430（最終閲覧 2020 年 2 月 28 日）

おわりに

中崎町を訪れている来街者は、商業店舗だけに魅力を感じているのではなく、もともと住民が住んできた古い町並みにもひかれてやってきている。中崎町のイメージとなっている「レトロなまち」、町家や長屋を改装したカフェ、雑貨店、古着店などの店舗だけでなく、地域住民が暮らす町並み自体が人々を引き付けている。インタビューやブログにより、ブログや SNS を見て中崎町に訪れ、また自分も写真を撮り SNS にアップする目的で訪れている人もいれば、日本の文化を知ることを楽しみに、人びとが生活する地域として中崎町を訪れている人もいることが観察された。また、中崎町においては、来街者は人が暮らすところを訪れているということで、地域に暮らす人に迷惑にならないように気を使う訪問者もいるということが明らかになった。中崎町は、地域の人々が暮らすところに店舗が増え、来街者が増加していることから、地域の人々や店舗関係者も来街者に対して様々な取り組みをしているが、来街者の側からも、ブログや SNS を通じてよりよい関係づくりにつながる意識を持つようになることが期待される。

参考文献

岩崎信彦・鰺坂学・上田惟一・高木正朗・広原盛明・吉原直樹編(2013)『増補版　町内会の研究』お茶の水書房

上田和弘・神野直彦・西村幸夫・間宮陽介編(2005)『都市の再生を考える　第３巻　都市の個性と市民生活』岩波書店

キーナー・ヨハネス(2015)「場所の磁場を生みだすリノベーション ： 大阪市北区中崎町界隈の事例から（特集 都市大阪の磁場 ： 変貌するまちの今を読み解く)」『市政研究』186、pp. 54-65 大阪市政調査会

熊谷亮平・稲坂晃義・濱定史・渡邊史郎(2016)「住商混在型木密地域におけるリノベーション構法とその集積効果」『住総研　研究論文集』No.43、2016年版 pp.23-34

財団法人大阪都市協会編(1980)『北区史』 北区制 100 周年記念事業実行委員会

篠田なつき・松村暢彦・成美邦碩(2008)「密集市街地における住居コンバージョン店舗集積地区の空間印象評価に関する研究―大阪市中崎地区を事例として―」『(社)日本都市計画学会　都市計画論文集　No.43-3 pp.433-438

谷直樹・竹原義二編著(2013)『いきている長屋　大阪市大モデルの構築』 大阪公立大学共同出版会(OMUP)

中道陽香(2015)「隠れ家的な街としての大阪・中崎町の生成―古着店集積を事例にして―」『空間・社会・地

注意することなどについては日本に行った人の SNS で知り、学んでいきます。日本に来る時には、SNS、日本に行ったことのある人の話、ウェブサイト、ガイドブックなどを参考にします。

日本へのリピーターで、日本に住む中国人のインフルエンサーの推奨により、日本の文化を楽しんだり、地元の人が訪れる場所へ訪問し、地元の人の生活を垣間見たり、地元の人と接することを楽しみにしている外国人旅行者もいる。日本と中国においてマナーが違うことを承知しており、自分の行動やふるまいが日本人に不快感を与えないように気を付けて行動している。日本でのマナーや日本人に対する態度など、積極的に学び、日本での体験に活かそうとしている。

韓国語の中崎町についてのブログでも、以下のように住宅の写真とともに、住民に対する配慮を呼びかけるコメントがされているものもある。

図２　韓国語のブログに掲載されていた住民が暮らすところという写真

（原文）

나카자키쵸 골목은 주민들이 사는 곳이기 때문에 최대한 배려해야 한다.

나카자키쵸는 관광지 이전에, 사람들이 사는 주택 골목이다.

그래서인지 골목 자체에 사람들은 많지만, 조용조용한 분위기이다.

図１　(原文)Salon de Amanto is a 1880s-era artist-run cafe and community center. Credit Andrew Faulk for The New York Times
(訳)「Salon de AManTo 天人」は 1880 年代のアーティストが経営するカフェ・コミュニティセンターAndrew Faulk が The New York Times に提供。
出典：The New York Times ホームページ「36 Hours in Osaka, Japan」https://www.nytimes.com/interactive/2017/11/16/travel/what-to-do-36-hours-in-osaka-japan.html（最終閲覧 2020 年 2 月 28 日）

The New York Times のホームページにおいても、中崎町は狭い路地と木造住宅、そこにある木造住宅の「レトロ」な店が街の魅力として取り上げられている。

ケースⅣ　中国上海からの 37 歳　男性に 2019 年 10 月 16 日 19：00～に聞き取りを行った。個人手配旅行できていて、中崎町にはインフルエンサーの勧めで来ました。今日は中崎町をぶらぶらして、当地の人しか見られない景色を見られて幸せでした。地元の人の生活が見えるところで興味深かった。人びとの普段の生活の様子や日常の営みを見ることが好きです。日本へは 5 回目、2 回は九州へ行き、大阪へは 3 回目です。個人旅行で来る人は、手配など大変ですが、それでも来たいということは、本当に日本に興味があって来たい人が来るということだと思います。

地元の人や、店員、お客さんと交流したいですが、英語を流ちょうに話せる日本人は少ないため交流は難しいと思いました。しかし、日本に来ると皆さん親切で、歓迎してもらっていると感じます。日本人は礼儀を重視する人々なので、日本人の皆さんが気を悪くしないように気を使い、失礼にならないように気を付けています。日本のマナーや日本で

Friday

1) 4 P.M. NEIGHBORHOOD FINDS

Acquaint yourself with a little-known side of Osaka in Nakazakicho, a rare neighborhood of narrow lanes and wooden houses that survived the air raids of World War II and decades of urbanization that followed. Now innovative locals have transformed many long-neglected buildings into creative spaces like Salon de Amanto, an artist-run cafe and community center that hosts lectures and performances in a creaky tenement from the 1880s. Around the corner, wade through piles of vintage clothes and kitschy zakka (life-improving miscellany) at Green Pepe. Scope out contemporary art exhibits at Atelier Sangatsu, a gallery beside a colorful graffiti wall. Shop for wearable art at Hanane T-shirt Living, or scoop up rare Care Bears from the wacky collection at Select Shop Tenten. Finally, recharge at Utena Kissaten, a retro coffee shop in a well-preserved traditional wooden house.

（日本語訳）

日本の大阪での 36 時間

2017 年 11 月 16 日 INGRID K. WILLIAMS

金曜日

1) 午後 4 時　近所での発見

第二次世界大戦の空襲とその後数十年の都市化にも生き残った、狭い路地と木造住宅が残るめったにない地域、中崎町で、大阪のあまり知られていない面に触れてみよう。現在、革新的な人々は、「Salon de AManTo 天人」のように、多くの、長い間放置されていた建物をクリエイティブな空間に変身させた。「Salon de AManTo 天人」は、アーティストが経営するカフェであり、コミュニティセンターで、1880 年代に建てられたきしむ借家でレクチャーやパフォーマンスを開催している。すぐ近くの「グリーンペペ」で古着の山とキッチュな zakka（生活を向上させる雑貨）をくぐりぬけ、カラフルな落書きのある壁の横のギャラリー、「アトリエ三月」で現代アートの展示を見よう。「花音 hanane t-shirt living」で着られるアートを買ったり、セレクトショップ「tenten」で奇抜なコレクションからレアなケアベアを手に入れよう。最後に、保存状態の良い伝統的な木造住宅のレトロなコーヒーショップ、「うてな喫茶店」で充電しよう。

は写真スポット(photo zone)です。

中崎町は韓国の SNS で人気の写真スポットとなっており、自分も写真を撮って SNS に上げるそうであるが、地域の人たちとの触れ合いも望んでいるとのことであった。

ケースⅡ　古民家改装カフェにて香港からの 30 代カップルに 2019 年 2 月 27 日 17：30～聞き取りを行った。中崎町にはふらっと来て、このお店については知らなかったが、ぶらぶら歩いていてこの店に入ってみました。大阪は初めてで、6 日間滞在します。これまでで良かったのは、滞在している大国町近くのとても年配のご夫婦がやっている古いレストランです。雰囲気がとてもよかった。大阪にはミュージアムが少なく、街中のアートスポットも少ないと思います。私たちはショッピングのために来たのではありません。ふつう香港からの観光客は京都に行きますが、私たちはゆっくりしたいので大阪だけです。その街の文化を知りたいので、そのためにはゆっくりすることが大事です。香港と台湾には、古くからの文化が生きています。文化を大事にしています。

京都などの有名観光スポットやショッピングに興味があるのではなく、その街の文化を理解したいという人も中崎町を訪れている。

ケースⅢ　古民家改装カフェにてアメリカ合衆国からの 30 代カップルと 2 歳の子ども、20 代カップルに 2019 年 9 月 11 日 18：15～に聞き取りを行った。個人旅行で来ています。中崎町には、New York Times でこのカフェと近所を見てきました。古い町並みの雰囲気のイメージが良いと思い来ました。日本へは 4 回目、大阪へは初めてです。文化と食べ物を楽しみに来ました。中崎町の地元の人、店員さん、来街者と触れ合いたいと思います。旅行中に日本人と触れ合いました。日本にはまたぜひ来たいです。

日本へのリピーターで、大阪に文化と食べ物を楽しみに、日本人とも触れ合いたいと思って来ているアメリカ人旅行者も中崎町を訪れている。

※The New York Times のホームページで、大阪を紹介する記事の中に、以下のとおり中崎町についての記述が見つかった。

（原文）
36 Hours in Osaka, Japan
By INGRID K. WILLIAMS NOV. 16, 2017

ている。12 月には『大阪人』にて「中崎町的なるもの」と題して中崎町の特集が組まれている。2012 年 10 月には生活情報誌『CREA』に「レトロな中崎町」として書かれている。2017 年 8 月には『女性自身』にも「大阪おんな旅　新３大名所巡り」という記事で新３大名所に中崎町が取り上げられている。2018 年 7 月には『関西ウォーカー』で、「NMB48 渋谷凪咲が発見！＃かわいい関西 7 回・かわいいを探しにレトロな中崎町へ」という記事がある。「レトロ」と共に「かわいい」イメージで記事が書かれている。2019 年 1 月には『セブンティーン』にて、「OSAKA Seventeen　大阪めっちゃガイド！」の中に中崎町も取り上げられており、さらに 2019 年 2 月には『EX 大衆』において、「うちらがオモロイ場所連れてってあげる！NMB48 と行くッ！OSAKA ふしぎ発見ツアー65 回・まるで昭和へタイムスリップ！情緒ある長屋のカフェ巡り　中崎町」との記事がある。

中崎町は、雑誌において「レトロなまち」というイメージが定着している。旅行雑誌や街歩き雑誌にも取り上げられているが、それ以外の雑誌である芸能誌やファッション誌、ライフスタイル誌の中でも多く取り上げられるようになっている。

では、ブログやＳＮＳでは、中崎町はどのように取り上げられているのだろうか。2019 年 12 月 7 日時点でのインスタグラムにおける「＃nakazakicho」は 4.9 万件の投稿があり、「＃nakazakicho　café」は 1,000 件以上の投稿がある。日本語、英語、韓国語、フランス語、タイ語などで投稿されている。

ブログやＳＮＳ等では、中崎町の風景と、風景を背景に本人が映ったもの、食べ物店や食べ物、雑貨などを紹介したものが主である。

４.中崎町を訪れている外国人旅行者の意識

中崎町を訪れている外国人旅行者は、どのような情報をもとに、何に惹かれ、何を目当てに訪れているのであろうか。また、店舗の従業員や地域の住民に対し、どのような意識を持っているのであろうか。韓国からの旅行者、香港からの旅行者、アメリカ合衆国からの旅行者、中国からの旅行者にインタビューを行った。なお、旅行者に対するインタビューは英語により行い、筆者が翻訳し、要約した。英語のホームページ記事は筆者が翻訳、韓国語のブログ等は筆者の韓国語ができる知人が訳したものを筆者が文章化した。

ケースⅠ　中崎西１丁目の路地にて韓国、ソウルからの 20 歳男性 4 人組に 2019 年 2 月 25 日 11:30～、聞き取りをおこなった。中崎町へは、インターネット、SNS を見て来ました。目的は、カフェや良い雰囲気（good mood）のためです。中崎町について印象に残る言葉やイメージ

前田・瀬田（2012）は、中崎地区[8]には「戦前の木造建物が相当数残存しており、長年住み続けている地元住民間には相互扶助的なコミュニティが存在して」おり、他方で「住宅から店舗へのコンバージョン」が 2000 年ごろから急増しており、その過程において来街者が増加し、まちの「ブランド化、観光地化」がなされていると述べている。「梅田のすぐ隣で『自己実現の装置としての長屋』再生が試みられた結果現れた、レトロでスローな『心ほどけるまち』の空気感や『レトロかわいい隠れ家ショップ』」などを特徴とする「中崎町的なるもの」という地域イメージのブランドとしての確立のもとで「流動的なまちの営みが続いて」おり、そのなかで、地域との関りを深めようとする店舗関係者は、地元コミュニティにとって望ましいと述べている。そのうえで、「『中崎町的なるもの』の魅力は、長屋再生、すなわち古くからの住宅地というベースがあってこそであり、この魅力を維持していくには、店舗経営者が防犯・防災・清掃等生活レベルの協力をしていくことが重要である。」と、店舗経営者が地域活動をしていくことの重要性を述べている。また、「今後は急増するマンション住民と地元住民、そして店舗経営者との関係性について分析する必要がある」とも指摘している。

以上のように、中崎町においては、古い建物を改装した店舗によるまちのイメージにより、来街者が増え、また地域に根付いて活動する店舗経営者もいる。さらに、最近、古くからの街並みと店舗を訪れる訪日外国人を含む来街者が増加している。

３．中崎町についてのメディアでの取り上げられ方

中崎町は雑誌記事においてどのように取り上げられてきたのであろうか。大宅壮一文庫雑誌記事牽引検索 Web 版において 2020 年 2 月 28 日時点での「中崎町」での検索結果は 43 件であり、一番古いものは 2001 年 11 月『日経トレンディ』において、「Street Watching 大阪　中崎町　若い店主が町家を改造　ポスト梅田の注目スポット」であった。以降取り上げられる雑誌が増えていく。2002 年 6 月には大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所発行の情報誌『CEL』にて、「“創造都市”の時代へ“創造都市”への取り組み　再生の実験タウン『中崎町』」、2002 年 11 月には『大阪人』で、「町屋・喫茶・文化考　記憶、そして再生　中崎町物語（大阪市北区）よみがえる北の長屋まち」として再生のまちとして取り上げられている。2004 年には、『関西ウォーカー』で、「この街がくるっ！新レトロエリアを行く！町家や古ビルの最新スタイルに注目！」として近隣地域と共に「レトロ」というイメージで紹介されている。2006 年には 10 月には『Hanako WEST』の「全大阪ガイド　今、一番旬なお店をナビゲート」という記事に中崎町も入っ

[8] 前田・瀬田は、論文中で、中崎 1 丁目、中崎 2 丁目、中崎 3 丁目、中崎西 1 丁目、中崎西 2 丁目、中崎西 3 丁目、中崎西 4 丁目を「中崎地区」と記している。

地下鉄谷町線中崎町駅があることもあり、新聞[4]、雑誌[5]インターネット[6]等、メディアにおいてもおおむね古くからの町名である「中崎町」と呼ばれ、人々にも認知されている。大正 13（1925）年の改正により、中崎町という町名が誕生した。昭和 53（1978）年に実施された新住居表示により、中崎へと町名が変わり、現在は中崎町という地名はなく、中崎 1～3 丁目、中崎西 1～4 丁目となっている[7]。

連合振興町会等の地域活動においては、上記に加えて旧済美小学校区である万歳町、扇町 2 丁目 5 番、6 番と合わせて済美地域と呼ばれる。本論文においては、地域での呼び方に倣い、済美地域を中崎町と位置付ける。

２．中崎町についての先行研究

中崎町における、戦前から残る町屋・長屋の再生型店舗の集積形成と、またそれが地域にもたらす影響についての先行研究は、地理学から論じたもの（キーナー、中道）、建築学から論じたもの（熊谷他）、都市計画から論じたもの（前田他）などがある。

キーナー(2015)は、中崎町におけるリノベーションが地域のイメージを「こじゃれたレトロタウン」に変え、経済的活動の磁場を生み、裕福な経営者を招いていると論じている。

中道(2015)は、中崎町への古着店の集積が、「一部の人だけに知られた、落ち着いて過ごせる場所」という隠れ家的な街と古着店の居心地の良さにより起こっており、そのイメージがさらに人や店を呼ぶことにつながっていくと述べている。

熊谷・稲坂・濱・渡辺（2016）は、「既存建築の改修による更新が地域内に増加することにより、街の景観やコミュニティの改善、居住者や来街者の属性などの変化をもたらすことをリノベーションの集積効果と定義」したうえで、「中崎町は極度に集積が進行しており、またカフェを中心とした店舗用途が多」く、「このような同種用途の集積は地区全体を特徴づけており、多数の来街者が訪れるメリットもあり、半ば観光化した地区となっている」と述べている。

4　たとえば、2018 年 2 月 26 日、日経 MJ「大阪・梅田駅から歩いて 15 分、中崎町、『都会の昭和』好きやねん、長屋に個性派ショップ、若者集う。」との見出しで中崎町が紹介されている。また、2019 年 03 月 28 日、朝日新聞夕刊でも「最新の韓国アニメ、特集上映　大阪・中崎町で来月 6～10 日」との記事がある。

5　たとえば、『SAVVY 2018 June』では、「梅田の新しい・おいしい！中崎町　梅田　北浜」というタイトルで、お店が紹介されている。

6　たとえば、キナリノというウェブサイトでは、「レトロな町並み散策へ☆注目スポット大阪中崎町の隠れ家カフェ 9 選」として、中崎町のカフェが紹介されている。
https://kinarino.jp/cat4-%E3%82%B0%E3%83%AB%E3%83%A1/10001-%E3%83%AC%E3%83%88%E3%83%AD%E3%81%AA%E7%94%BA%E4%B8%A6%E3%81%BF%E6%95%A3%E7%AD%96%E3%81%B8%E2%98%86%E6%B3%A8%E7%9B%AE%E3%82%B9%E3%83%9D%E3%83%83%E3%83%88%E5%A4%A7%E9%98%AA%E4%B8%AD%E5%B4%8E%E7%94%BA%E3%81%AE%E9%9A%A0%E3%82%8C%E5%AE%B6%E3%82%AB%E3%83%95%E3%82%A79%E9%81%B8(最終閲覧 2020 年 2 月 28 日)

7 財団法人大阪都市協会編(1980)『北区史』pp.525－526

外国人旅行者の意識からとらえた
中崎町のイメージ形成

嵜本　圭子

（要約文）
中崎町は戦前からの路地と古い木造住宅が残り、古い建物を改修した店舗と共にメディアなどによって取り上げられ、外国人を含む来街者が増加している。中崎町のイメージはどのように形成されてきたのか、中崎町を訪れる人はどのようなイメージにより、何を目的に訪れているのか考察した。

はじめに

大阪市北区中崎町は、大阪市の中心である梅田のすぐ近くに位置しながら、戦前からの路地と古い木造住宅のある街並みが残り、レトロなまちとしてメディアにも取り上げられ、多くの人が訪れている。中崎町を訪れる人々は何に惹かれ中崎町を訪れているのであろうか。近年、中崎町には外国人旅行者も多く訪れ、中崎町のイメージの形成にもかかわってきている。それがどのように形成されているのか考察する。

１．中崎町の概要

中崎町は、JR 大阪駅、阪急、阪神のターミナル駅がある梅田から徒歩約 10 分という都心近くでありながら、戦前からの街並みが残る。江戸時代、一帯は大坂三郷の外側で、田畑が広がっていた。明治後期から大正にかけ市街化され、畦道や運河がそのまま通りや路地に姿を変え、長屋の町が広がっていった[1]。昭和 20（1945）年の大阪大空襲で旧北区は 44.2%が消失したなかで、全域が被害にあった万歳町を除き、中崎町は焼け残った[2]。昭和 40（1965）年頃は、金属工場、製麺工場、メリヤス店、ガラス店、印刷会社など町工場も多く、住宅地や市場など、賑わいのある地域であった[3]。

---

[1] 橋爪紳也編(2004)『大阪　新･長屋暮らしのすすめ』p.35
[2] 財団法人大阪都市協会編（1980)『北区史』p.173、済美連合振興町会編(2016)『済美の人　街なみ　暮らし　OLD & NEW』p.31
[3] 済美連合振興町会編(2016)『済美の人　街なみ　暮らし　OLD & NEW』、大阪市立済美小学校（1966)『大阪市立済美小学校 50 周年記念誌』

参考文献

「いとしの黒馬よ」『ビクター・レコーディングス②１９３８～１９４７』ビクター・エンターテインメント、VICL-６２９０５～６、二〇〇八年。

「ボタンとリボン」『SP盤復刻による懐かしのメロディ-池真理子-愛のスィング』日本コロムビア、COCA-11424、一九九四年。

中村政則『戦後史』岩波書店、二〇〇五年。

永冨真梨「日中戦争開始前後の日本における周縁的男性像―灰田勝彦のカウボーイソング〈いとしの黒馬よ〉を例として」『戦争社会学研究』第３巻、二〇一九年、一七九-一九八頁。

アンドリュー・ゴードン編『歴史としての戦後日本』みすず書房、二〇〇二年。

山之内靖、成田龍一、ヴィクター・J・コシュマン『総力戦と現代化』柏書房、一九九五年。

Allison McCracken, *Real Men Don't Sing: Crooning in American Culture* (Durham: Duke University Press, 2015)

Mari Nagatomi, "Tokyo Rodeo: Transnational Country Music and the Crisis of Japanese Masculinities," (PhD diss., Doshisha University, 2019).

Jocelyn R. Neal, *Country Music: A Cultural and Stylistic History* (London: Oxford University Press, 2013)

Stephanie Vander Wel, "The Lavender Cowboy and 'The She Buckaroo': Gene Autry, Patsy Montana, and Depression-Era Gender Roles." *The Musical Quarterly*, 2012, 95.2-3: pp. 207-251.

る都会へ戻ることを懇願することで、一家の稼ぎ手としての男性の役割と、その稼ぎで消費生活を営むいわば従属的な女性の役割を補完しているとも読み取ることができる。池の「ボタンとリボン」の女性は、結果的に男女の既存の性役割に従うのであった。

同時期、敗戦と連合国軍の占領によって女性化された日本では、女性は、ファシズムからアメリカが率いる連合国によって救われた、先の戦争の妥当性を示すシンボルとして、そして、新しい日本の希望を示す象徴として機能したため、いわば男性的な象徴である想像上の西部、もしくはフロンティアでカウガールを演じることができたのかもしれない。

３．おわりに

本報告書で見てきたように、「いとしの黒馬よ」と「ボタンとリボン」では、戦前には「西部」が女性的な男性によって歌われたということと、戦後は男性的な女性によって歌われたという違いがある。しかし、類似点も確認できる。例えば、灰田は日系人であり、女性的な声を特徴とし、日本純血の男性と比べると周縁的な存在である。また、池真理子は、女性であるという時点で、国家の舵取りをする男性と比べれば周縁的な存在であるし、宝塚女優であり、活発的な女性を体現することを許された、一般女性に与えられた既存のジェンダー規範を刺激する存在だった。つまり、アメリカの西部、いわば粗野で未発達な前近代的かつ、近代的な未来を夢見る想像の場を成立させるカウボーイやカウガールは、戦前戦後を通して、男性中心的で中産階級的な近代国家において周縁化された主体によってのみ具現化されることが可能だったということとも言えるのかもしれない。

この戦争を通した類似点は、アンドリュー・ゴードン、中村政則、成田龍一などが論じているよう、戦後における様々な問題が戦前から続く近代や近代への欲望に原点を持つことを裏付けている。ポピュラー音楽の貫戦史的な叙述によって、近代への欲望がどのように「あたりまえ」なものとしてポピュラー音楽を通して機能していたかを更に批判することへと繋がることを願う。

男性俳優のボッブ・ホープが歌っている「ボタンズ・アンド・バウズ(Buttons and Bows)」という曲のカバーである。ダイナ・ショアという女性歌手によってもヒットしたが、『SP盤復刻による懐かしのメロディ--池真理子-愛のスィング』というアルバムで楽曲解説をした森一也によれば、ボッブ・ホープの劇中の歌唱シーンを見て、本楽曲のカバーが日本でも売れると録音が決定したそうである。映画では、強いカウガールであるカラミティー・ジェーンに尻を引かれている臆病者のボップ・ホープ演じるピーター・ポッターが、西部へ向かう幌馬車の中で、都会へ帰りたい思いを歌に乗せて表現する。このような「女々しい男性」を戦後日本で池真理子が歌唱するというカバー曲におけるジェンダーの転覆は興味深い。

まず、アレンジにおける「翻訳」に焦点を当てたい。池のバージョンは、オーケストラで始まり、金管楽器、鉄琴、コーラスまでついた豪華な演出である。楽曲の最後には、上昇するメロディーと共に、歌詞「ボタンとリボン」の母音を長く伸ばし、ダイナミックに歌い上げられている。これは、シンプルなリズムギターでアレンジされ、静かに演奏されているホープのバージョンと大きく異なる。つまり、池の「ボタンとリボン」の女性は、男性に気遣いもなく、よりダイレクトに要求できる女性を表現しているとも読み取れる。これは、敗戦という「新しい」日本のフロンティアでは、女性は「解放」され、男性に憚ることなく、モダンで近代的な男らしさを要求することができた、とも解釈できる。

次に、ホープが歌った原曲を池がカバーしたというジェンダーの「転覆」について考えてみたい。原曲では、ホープ演じるポッターは、洋服を着飾って、「女性が女性である（where women are women）」東部へ帰ろうとコミカルに訴える。しかし、池のバージョンでは、「田舎はごめん」といって、男性に都会へ帰らせてと懇願する。映画の中では、臆病者のホープがジェンダー規範に収まるような女性像をカラミティー・ジェーンに期待しつつも、東部へは帰ることができる見込みがない諦めを歌に乗せることで、結果的に力強い女性像を容認している。しかし、この「女々しい」男性を池が演じることで、女性の「未開」の土地へ突き進む怖さが示される。そして、自分の要求を男性に頼めるある意味自立した女性像を体現しながらも、女性の領域とされる消費文化を謳歌でき

ウボーイの男らしさと、ハワイで生まれた灰田の混血性は、帝国日本の国際性をアピールするのに都合よく機能したと解釈できる。なぜなら、日中戦争開始前夜には、日本の国際的な技術革新が帝国の近代性を象徴するものとして讃えられたからである。しかし、「いとしの黒馬よ」で灰田が演じた男性像を考えると、このような国際的男性像は、帝国日本を代表する男性としては機能しているとは言い切れない。灰田は、純血の日本人男性ではなかったからこそ、カウボーイに扮してそのような男性を演じることができたとも考えられるのではなかろうか。私が博士論文でも示したよう、戦前カウボーイのシンボルは、新聞などで下層階級が好むものとして批判されていた。灰田によって演じられた下層階級的でアメリカ的なシンボルであるカウボーイは、当時の人種やジェンダーの規範を揺るがしながらも、純血日本人の力強い男らしさを覇権的なものとして補完しながら、男性的侵略戦争を正当化する役割を担ったとも言える。

２.池真理子の「ボタンとリボン」

戦前、灰田勝彦などの混血的な男性によって演じられ広められたカウボーイとアメリカの西部のイメージは、戦後直後には、轟夕起子や、池真理子などの女性歌手によって広く知れ渡ることになる。

「西部もの」とは、西部劇のテーマをふんだんに使ったアメリカで作曲された楽曲のカバーと日本で作られたオリジナル曲を含む流行歌で、1950 年 11 月 9 日付の読売新聞によれば、日本ビクター、コロンビア、キング、ポリドールなどのレコード会社各社がこぞって発売していている。岡春夫の唄による「陽気なカウボーイ」、若原一郎による「バンジョーの好きな羊飼い」、中島孝による「西部やくざ」などの男性歌手による「西部もの」も発売されたが、人気があったという資料は今のところ見つかっていない。アメリカ占領と日本の敗戦により「去勢」され、新たな「近代」を目指す「荒野」であった当時の日本という文脈で考えると、日本女性による「西部」が「新しい」日本を表象するのにより適していたのかもしれない。

ここで、池真理子による「ボタンとリボン」を紹介する。この楽曲は、アメリカで 1948 年に公開された『腰抜け二挺拳銃（The Paleface）』という西部劇の中で、

律が特徴的である。また、シンギング・カウボーイは、マイクに近づいて、スムーズに歌う歌唱法、クルーニングを多用した。アメリカ研究者のアリソン・マッカレーンによれば、クルーニングは当時女性的なものとして認識されていたそうで、「エンプティー・サドルズ」を歌ったビング・クロスビーはその女性的な声とのバランスを取るために、広告やそのほかの雑誌では、一家の主である「まっとうな」男らしさを強調したそうである。さらに、音楽学者のステファニー・ヴァンダー・ウェルは、シンギング・カウボーイは女性的な男性を彷彿させ、大恐慌時に失われかけた男らしさが投影されたものであると論じている。つまり、男らしい「カウボーイ」とは異なった男性像が、カウボーイ・ソングでは表現されたと言って良いだろう。

さて、日本でも、カウボーイ・ソングは、非常に曖昧な男らしさを発信するポピュラーメディアとして機能していたと言える。この点を精査するため、原曲の「エンプティー・サドルズ」と「いとしの黒馬よ」の歌詞の違いを見ていきたい。

原曲の「エンプティー・サドルズ」では、西部開拓を進めた侵略者の死に対する鎮魂を主人なき馬に託し、彼らの過去の栄光を称える。つまり、主人公は、死者への悲しみを乗り越え、泣くことはしない。大恐慌後に失われかけた男らしさを、米国における侵略、近代化を達成した西部に求め、現在失われつつある「本来の」男らしさを擁護しているとも解釈できる。一方、「いとしの黒馬よ」では、「今日も北支の空は」という冒頭の歌詞からわかるよう、原曲では「過去の栄光」であったアメリカ西部が、帝国日本の侵略のターゲットである華北地域に翻訳される。つまり、「いとしの黒馬よ」は、現在乗り越えるべき目標（「達成するべき野望」）を聞き手に提示する。過去の霊に同情しながらも涙は見せない原曲のカウボーイとは違い、実際に戦いに敗れた軍馬に、「お国のため」なのだからと、その死に対して「許し」を請う男性像が描かれる。この「許し」とは、戦争に加担することを謝罪しそれを正当化する姿勢とも読み取れる。灰田勝彦は、クロスビーの女性的な歌声クルーニングを踏襲し、女々しいながらも戦争に積極的に加担する曖昧な男性像を演じる。えん

私が発表した学術論文で述べたよう、この曖昧なカ

西部劇イメージを利用したポピュラー音楽の戦争を経た翻訳

永冨　真梨

（要約文）
本報告書では、西部劇イメージを利用したポピュラー音楽が戦前と戦後を経て日本でどのように「翻訳」されたかを紹介する。そして、戦争を隔てた「翻訳」の相違点と類似点を示し、戦争を隔てたポピュラー音楽の歴史叙述の重要性についても考える。戦前の例として灰田勝彦のカウボーイ・ソング「いとしの黒馬よ」と、戦後の例として池真理子の「ボタンとリボン」を扱う。

１.灰田勝彦「いとしの黒馬よ」

灰田勝彦によって歌われた「いとしの黒馬よ」は、日本ビクターから 1937 年 12 月（一説では 1938 年 1 月）に発売された。本楽曲は、1936 年日本でも公開された西部劇コメディー『愉快なリズム（*The Rhythm on the Range*）』という映画の中で使われた挿入歌「エンプティー・サドルズ」のメロディーをそのまま使っている。歌詞は原曲の西部やカウボーイのイメージを残しながら、梅原しげるによる新たな日本語詞が使われた。

まず、この楽曲にどのような「翻訳」がなされたかを紹介する前に、まず、アメリカ合衆国で作られた原曲、「エンプティー・サドルズ」について紹介したい。本楽曲は、ティン・パン・アレイと言われていたニューヨークの音楽業界で活躍した、作曲家ビリー・ヒルによって書かれたカウボーイ・ソングと言われるスタイルの作品である。カウボーイ・ソングは、1930 年代頃にハリウッドで制作されたＢ級ウェスタンで使用された。これらの映画で、シンギング・カウボーイと呼ばれる歌うカウボーイによって、カウボーイ・ソングは歌われた。カントリー音楽研究者のジョセリン・R・ニールによれば、映画を通して人気が出たカウボーイ・ソングは、楽譜の読み書きができる音楽家でないと書けないような非常に複雑な和音と、ゆったりとしたリズムで、ロマンチックな旋

うな解放後第一世代とも「ショアー後」の作家たちとも異なっている。ドレフュスという、まさに第三世代のユダヤ系フランス人が反ユダヤ主義の標的となっているころ、同世代の作家シュウォブは『少年十字軍』で宗教的熱狂に警鐘を鳴らしていたと言えるだろう。公私にわたって自らのユダヤ性について声高に語ることの無かったシュウォブも、最後まで自分を陥れたフランス軍への復帰を切望したドレフュスも、共に共和国フランスの価値観を内面化した十九世紀末の典型的なユダヤ系フランス人なのである。

（終）

◇報告で言及した文献

Marcel Schwob, *La Croisade des enfants* (1896), dans *Œuvres*, Phébus, 2001, pp.478-503.

マルセル・シュウォッブ『少年十字軍』多田智満子訳、王国社、1998 年、120-163 頁。

Clara Lévy, *Écriture de l'identité, les écrivains juifs après la Shoah*, PUF, 1998.

Nadia Malinovich, *French and Jewish: Culture and the Politics of Identity in Early Twentieth-Century France*, Littman, 2008.

——, *Heureux comme un Juif en France: Intégration, Identité, Culture, 1900-1932*, Honoré Champion, 2010.

Maurice Samuels, *Inventing the Israelite: Jewish Fiction in Nineteenth-Century France*, Stanford University Press, 2010.

——, *Les grands auteurs juifs de la littérature française au XIXe siècle*, Hermann, 2016.

◇本報告のもととなった拙稿

鈴木重周、「世紀末のユダヤ系作家——マルセル・シュウォブ『少年十字軍』をめぐって」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第 90 号、2007 年、168-181 頁。

——、「フランスにおける「ユダヤ文学」——ジッドの『日記』を手がかりとして」、『フランス語フランス文学研究』、日本フランス語フランス文学会、第 112-113 号、2018 年、353-368 頁。

第八の語り：教皇グレゴリウス九世（le pape Grégoire IX）

語り手たちの顔ぶれは、キリスト教徒（キリスト教世界の頂点である二人の教皇と最下層に位置する放浪僧、マルセイユで子どもたちを奴隷として売り渡す回船業者の書記、十字軍兵士の子どもたち）、イスラム教徒（イスラム僧）、異教徒（キリスト教の神に祈ることができない癩者）と宗教的に分類することができる。目撃者として、当事者として、語り手たちがそれぞれ「子どもたちの十字軍」について証言することによって、テクストは、「無垢なキリスト教徒の子どもたちがイスラムによって奴隷として売られた悲劇」という従来のキリスト教徒側からの解釈を揺るがしている。複数の語りから浮かび上がるのは、敵であるイスラム僧が子どもたちに向ける憐憫であり、同じキリスト教徒であるマルセイユの回船業者が子どもたちを売買する非道であり、指導者である教皇たちが何もできずただ神に祈る無力さである。

2．6．宗教的熱狂への警戒

ここで想起したいのが、シュウォブが『少年十字軍』を『ジュルナル』誌（*Journal*）に発表していたのが 1895 年 2 月から 4 月だったという事実である。この時期は、アクチュアルな「宗教的熱狂」である反ユダヤ主義が爆発したドレフュス大尉の軍籍剥奪式（1895 年 1 月 5 日）の直後であった。ヨーロッパの歴史において、社会が混乱すると最初に標的となるのはユダヤ人たちであった。事実、十字軍が組織されるたびに各地のユダヤ人居住区が略奪や暴行の対象となった。ドレフュス事件期、十九世紀末フランスでの反ユダヤ主義の爆発を目の当たりにして、ユダヤ系作家シュウォブが、十字軍とドレフュス事件に共通するキリスト教世界の宗教的熱狂に警戒心を募らせていたことは想像に難くない。

むすび

フランスにおける「ユダヤ文学」を考えるとき、その有りようは時代と社会状況によって様々である。革命による解放と、フランコ・ジュダイズムと呼ばれるホスト国への積極的な同化政策を経た第三世代のユダヤ系フランス人たちは、先行するフォアのよ

ら三代目を迎えるユダヤ系フランス人に典型的なものであり、彼らは、やや侮蔑的なニュアンスを伴う「ユダヤ人」（Juifs）ではなく、宗教色の薄い「イスラエリート」（Israélites）を自称した。

2．3．史実としての少年十字軍

シュウォブがテクストの題材とした「少年十字軍」とは、1212年ごろ、ドイツ、フランス、イタリアなどヨーロッパ各地で、同時多発的に、子どもたちが聖地奪回のためにエルサレムへと出発したという事件である。その結末は悲惨なものであり、子どもたちが聖地にたどり着くことはなく、ある者は地中海で消息を絶ち、ある者はイスラム教徒の奴隷となり、帰国できたのはごくわずかだったと言う。

2．4．複数の語りの並置

シュウォブは、中世の歴史事件を文学テスクトに再構成するにあたって、事件に関連する人物たちによる語りを並置するという手法と採用する。この手法はシュウォブの独創ではなく、彼が愛読していたイギリス文学、とりわけ詩人ロバート・ブラウニング（Robert Browning, 1812-1889）の『指輪と書物』（*The Ring and the Book*, 1868）から着想を得たものである。

2．5．語り手たち

シュウォブは、以下の語りによって物語を構成している。

第一の語り：放浪僧（le Goliard）

第二の語り：癩者（le lépreux）

第三の語り：教皇インノケンティウス三世（le pape Innocent III）

第四の語り：三人の子どもたち（les trois petits enfants）

第五の語り：回船業者書記フランソワ・ロングジュー（François Longuejoue, clerc）

第六の語り：イスラム僧（le Kalandar）

第七の語り：幼いアリス（la petite Allys）

語で「大災厄」、現在のフランス語においてはナチス・ドイツによるユダヤ人絶滅作戦を表す）の経験と、文学テクストの執筆にフランス語という言語を選択したという二つの共通項によって「ショアー後のユダヤ人作家たち」とカテゴライズしている（Lévy 1998）。

2. ドレフュス事件をいかに描くか

——マルセル・シュウォブ『少年十字軍』を読む

2. 1. 裏切り者のユダヤ人ドレフュス

フランス革命によって他のヨーロッパ諸国に先駆けてユダヤ教徒を「解放」した共和国フランスで、突如として反ユダヤ主義が顕在化したのが、陸軍参謀本部におけるユダヤ系将校アルフレッド・ドレフュス（Alfred Dreyfus, 1859-1935）のスパイ行為をめぐる冤罪事件として知られるドレフュス事件であった。

1895 年 1 月 5 日の軍籍剥奪式で公衆の面前でサーベルを折られるドレフュスを描いた『プチ・ジュルナル・イリュストレ』（*Le petit journal illustré*）紙（1895 年 1 月 13 日号）の挿画は、今日、世界中で知られている。また、右派論客たちが残した軍籍剥奪式のルポルタージュは、「裏切り者のユダヤ人」ドレフュスに対する冷酷な表象を現代に伝えている（モーリス・バレス「ユダのパレード」、レオン・ドーデ「懲罰」等）。ベル・エポック期のフランスでは、ドレフュスという一人の「ユダヤ人」をめぐって、メディアは連日、テクストとイメージによってこの「裏切り者」を表象し続けた。

2. 2. ユダヤ系作家シュウォブ

ここで本報告が取り上げるのが、フランス文学史において世紀末に数多現れた象徴派作家の一人として知られるマルセル・シュウォブ（Marcel Schwob, 1867-1905）が 1896 年に出版した中篇『少年十字軍』（*La Croisade des enfants*）である。シュウォブは、独仏国境地帯アルザスにルーツを持つ伝統的ユダヤ教徒の家系に生まれたが、彼自身は文学テクストにおいても私生活においても、自身のユダヤ性について沈黙を守り続けた。この、自身をユダヤ教共同体よりもフランス共和国に帰属させる意識は、解放か

書かれたもの」と定義している（Samuels 2010:p.3, note7）。この定義によってサミュエルズは、これまでフランス文学史においてほとんど知られていたかった作家ウジェニー・フォア（Eugénie Foa, 1792-1852）を、「フランス語で小説を書いた最初のユダヤ人であり、いかなる言語であれ小説を書いた最初のユダヤ人女性」（Samuels 2016:p. 12）として取り上げる。十九世紀前半の七月王政期に大衆向けのメロドラマというジャンルで活動したフォアは、ユダヤ人女性とキリスト教徒男性との悲恋を描いた。彼女自身は後にカトリックへと改宗し、「ユダヤ人であることを主題」とするテクストは書かなくなってしまうが、それでも、職業作家としてのフォアが、おそらくは読者の需要に応じて「異教徒間の恋愛」をテーマとしていたことは重要である。

1．3．マリノヴィッチが着目する作家たち

歴史学者ナディア・マリノヴィッチは、フランスにおいてなおも根強い反ユダヤ主義が顕在化した十九世紀末のドレフュス事件期に青年期を迎えていたアンドレ・スピール（André Spire, 1868-1966）やエドモン・フレッグ（Edmond Fleg, 1874-1963）らによって、文学テクストに「ユダヤ的テーマ」（反ユダヤ主義との対決、フランス社会への同化、異教徒との婚姻）が再び表れるようになると指摘している（Malinovich 2008:p.36）。この動きを、革命政府によるユダヤ教徒への市民権付与（1790-1791）、すなわち解放後の第一世代であるフォアたちの再現として位置づけることもできるだろう。

1．4．「ショアー後」の作家たち

今日、フランスにおけるユダヤ人と文学との関わりをテーマとする研究の多くは、第二次世界大戦後に活動したユダヤ人作家について論じている。クララ・レヴィーは、ジョルジュ・ペレック（Georges Perec, 1936-1982、ポーランド移民の両親のもとパリ生まれ）、ロマン・ガリ（Romain Gary, 1914-1980、モスクワ生まれ）、アルベール・メンミ（Albert Memmi, 1920-、チュニス生まれ）、アルベール・コーエン（Albert Cohen, 1895-1981、オスマン・トルコ領コルフ島生まれ、後にスイス国籍取得）そしてエドモン・ジャベス（Edmond Jabès, 1912-1992、カイロ生まれ）ら、国籍も出生地も異なる 5 人のユダヤ系作家たちを「ショアー」（ヘブライ

【報告要旨】

ドレフュス事件からみる「ユダヤ」と「文学」

鈴木　重周

はじめに

本報告は、十九世紀末フランスにおける反ユダヤ主義とユダヤ系フランス人作家との関係を研究課題とする報告者が、近代ヨーロッパ史上最大の反ユダヤ主義事件であるドレフュス事件（1894-1906）に着目し、フランスにおける「ユダヤ」と「文学」をめぐるさまざまな状況の一端を明らかにしようとするものである。同時に、「文学研究・文化研究の方法とグローバル展開を探る」という本プロジェクトの趣旨に沿って、報告者自身のこれまでの研究の新たな可能性を、多様な専門をもつ研究者の前で発表することによって見出そうとする試みである。なお、本報告は、報告者がこれまで行った研究とその成果（稿末に記載）に基づくものであることをお断りしておく。

1. フランスにおける「ユダヤ文学」の諸相

1. 1. 「ユダヤ文学」とは

「ユダヤ文学」という語を一言で説明することは難しい。通常、「日本文学」、「英文学」、「フランス文学」という場合、それは作者の国籍あるいはテクストの執筆言語を基準としている。一方、「ユダヤ」が示すのは国籍でも言語でもない。「ユダヤ文学」を定義することは、そのまま「ユダヤ人」とは誰なのかを指し示すことと同じ困難と危険性をはらむものなのである。

1. 2. サミュエルズの定義

イェール大学のモーリス・サミュエルズは著書『イスラエリートの創出』において、フランスにおける「ユダヤ文学」を「ユダヤ人によって、フランス語で、ユダヤ人であることを主題として

・幸村誠『ヴィンランド・サガ （Vinland Saga）』講談社（既 22 巻：2005.4-）
・渡辺賢一郎「少女マンガの表現技法と歴史叙述としてのマンガ」岡本充弘・鹿島徹・長谷川貴彦・渡辺賢一郎編『歴史を射つ―言語論的転回・文化史パブリックヒストリー・ナショナリヒストリー―』お茶の水書房 2015 年 316－337 頁
・Eric Stimson,"12 Things You Can Learn About World History From Manga, And More" posted on 2014-01-31 17:30 EST （Animenewsnetwork サイト内）

※本報告の作成には、大阪市立大学 2019 年度戦略的研究 STEP-UP（基盤 B）の研究助成を受けた。

【文献目録】

・伊藤剛『テヅカ・イズ・デッド　ひらかれたマンガ表現論へ』星海社 2014（＝NTT 出版 2005）年
・伊藤遊「学習マンガ」キャラクター研究序説―教育・リアリティー―『国際漫画研究3：日韓漫画研究』京都精華大学国際漫画研究センター、2013 年、201－226 頁
・イトウユウ・山中千恵「政治―「伝記学習マンガ」を形作るもの」山田奨治編『マンガ・アニメで論文・レポートを書く 「好き」を学問にする方法』ミネルヴァ書房 2017 年 85－108 頁
・岩明均『ヒストリエ （Historie） 』講談社（既 11 巻：2003.1-）
・大窪晶与『ヴラド・ドラクラ （Vlad Drăculea）』株式会社 KADOKAWA（既３巻：2020.2-）
・大谷哲「「歴史」の眼で「見つける」こと―『ヘウレーカ』と『ヒストリエ』」『ユリイカ』2015 年 1 月臨時増刊号　特集＊岩明均、青土社
・小泉隆義「マンガと時代考証―学習漫画を中心として―」大石学・時代考証学会編『時代劇メディアが語る歴史―表象とリアリズム―』岩田書院 2017 年 39－58 頁
・櫻井準也「学習漫画と考古学」尚美学園大学総合政策論集 28（2019 年）1-36 頁
・『詳説世界史 B』・『詳説世界史研究』木村・小松・岸本編　山川出版社 2017 年
・惣領冬実『チェーザレ　破壊の創造者』原基晶（監修）講談社（既 11 巻：2005-）
・陳曦子「日本における三国志マンガの翻案過程―その創作概況から作品分析まで―」『ビランジ』30 号（2012 年）4－24 頁
・永田喜嗣「学習まんがにおける十五年戦争～戦争加害の視角的表象～」『季刊　中帰連』62 号（2017 年）56-67 頁
・中野晴行　編『漫画家たちが描いた日本の歴史』全 6 巻　金の星社
・鍋田吉郎「（インタビュー：漫画原作者）集英社 90 周年記念企画『学習まんが日本の歴史』全 20 巻」『青春と読書』2017 年 8 月号、38-42 頁
・萩尾望都『私の少女マンガ講義』新潮社 2015 年
・宮本大人「漫画においてキャラクターが「立つ」とはどういうことか（特集：キャラクターを読む）」『日本児童文学』49（2）2003 年、46－52 頁
・ヤマザキマリ、とり・みき『プリニウス （Plinius）』新潮社（既 9 巻：2014.1-）
・幸村誠「（公開講演会）漫画でつなぐ、中世北欧と現代日本」『史苑』2018 年、43-62 頁

《西洋前近代史（古代～近世）マンガ》
・青池保子史劇『アルカサル-王城-』、『修道士ファルコ』、『ケルン市警オド』（なお『エロイカより愛をこめて』にはトルコゲミレル島発掘調査団（浅野和生）発見の装飾モザイクが登場する。浅野　和生『サンタクロースの島―地中海岸ビザンティン遺跡発掘記』東信堂 2006 年を参照）
・池田理代子史劇（『ベルサイユのばら』（フランス革命）、『栄光のナポレオン-エロイカ（皇帝ナポレオン）』（近世フランス）、『女王エリザベス（宮本えりかと共著）』（近世イングランド）、『天の涯まで』（近世ポーランド）、『女帝エカテリーナ（アンリ・トロワイヤ原作）』（近世ロシア）
・磯見仁月『傾国の仕立て屋ローズ・ベルタン』（フランス革命）
・岩明均『ヘウレーカ』（西洋古代ギリシャ）
・犬童千絵『碧いホルスの瞳-男装の女王の物語』
・大西巷一『乙女戦争ディーヴチー・ヴァールカ』（フス戦争）
・大久保圭『アルテ』（ルネサンス絵画）
・カガノミハチ『アド・アストラ-スキピオとハンニバル』（ポエニ戦争）、
・菅野文『薔薇王の葬列』（シェイクスピア史劇）
・久慈光久『狼のロヴォルフスムント』（中世傭兵）
・坂本眞一『イノサン』（フランス革命）
・篠原千絵『夢の雫・黄金の鳥籠』（ヒュッレム）、
　　『天は赤い河のほとり』（古代アナトリア）
・惣領冬実『マリーアントワネット』
・竹良実『辺獄のシュヴェスタ』（西欧修道院）
・萩尾望都『王妃マルゴ』（近世フランス）
・ハロルド作石『7 人のシェイクスピア』
・日之本あかめ『エーゲ海を渡る花たち』
・古屋兎丸『インノサン少年十字軍』（中世十字軍）・真刈　信二原作 Double-S『イサック』（西欧近世 30 年戦争）
・山岸涼子『レベレーション』（ジャンヌダルク）
・技来静也『拳闘暗黒伝セスタス』・『拳奴死闘伝セスタス』（ローマ）

資料

《学習マンガ日本の歴史シリーズ》
・『学習漫画 日本の歴史』集英社、全 18 巻、1967 年
・『小学館版学習まんが 少年少女日本の歴史』全 22 巻、1981 年
・『集英社版学習漫画 日本の歴史』全 18 巻 1982 年
・『学研まんが日本の歴史』全 16 巻 1982 年
・『まんが日本の歴史』大月書店 全 12 巻 1987 年
・『集英社版学習漫画 日本の歴史』全 22 巻 1998 年
・『小学館版学習まんが 少年少女日本の歴史』全 23 巻 2008 年
・『学研まんが NEW 日本の歴史』学研教育出版 全 12 巻 2012 年
・『小学館版学習まんが はじめての日本の歴史』小学館、全 15 巻 2015 年
・『角川まんが学習シリーズ 日本の歴史』KADOKAWA 全 15 巻 2015 年
・『集英社版学習まんが 日本の歴史』集英社 全 20 巻 2016 年
・『歴史漫画タイムワープシリーズ』朝日新聞出版、全 15 巻 2017 年

〔櫻井準也 2019〕による

《学習マンガ世界の歴史シリーズ》
•『中公コミックス 世界の歴史』中央公論社、全 15 巻 1984 年（手塚治虫監修、樺山紘一編集参与、 いしはら俊・手塚プロダクションほか画）
•『集英社版学習漫画 世界の歴史』全 16 巻、1986 年（木村尚三郎監修、久松文雄・古城武司 画）
•『学研まんが 世界の歴史』学習研究社、全 15 巻、2003 年（長澤正俊監修、柳川正実指導、ムロタニツネ象画）
•『漫画版世界の歴史』集英社、全 20 巻、2009 年（＝文庫版 全 10 巻 2019 年）（本村凌二・平勢隆郎 ・後藤明・河原温・鈴木恒之・斯波義信・近藤和彦・遠藤泰生・並木頼寿・石井規衛・柴宜弘・相良匡俊監修、茶留たかふみ他画）
•『学研まんが NEW 世界の歴史』学研プラス、全 12 巻、2016 年（近藤二郎監修、加藤広史他画）
•『小学館版学習漫画 世界の歴史』小学館、全 17 巻、2018 年（山川出版社 編集協力、橋場弦・南川高志・小松久男・青木康・小田中直樹・渡辺賢一郎・岸本美緒・池田嘉郎・木村靖二 監修、新井淳也他画）

ころはむしろマンガによる物語であり、おそらくは各巻・各単元を担当したマンガ原作者や作家たちにストーリーは委ねられた。ここに手塚によるマンガによる歴史叙述を求めた姿を読み込むのは行き過ぎであろうか。今後の検討課題としたい。

なお、手塚が求めたであろうマンガ家自身の作家性に委ねた歴史叙述の試みとしては、蓄積がゆたかな日本史や中国古代史ではすでに業績がある。作家たちのオリジナル小編を時代・テーマごとのアンソロジーとしてまとめた企画〔中野晴行 編『漫画家たちが描いた日本の歴史』〕では、収められた小編はそれぞれフィクションの時代劇断片であるが、その連続通読によって同時代空間を読者に印象付けるのに成功している。同様のことは史記や三国志ほかのエピソードのマンガ化に取り組んだ横山光輝の諸著作ほか、読者層の厚い東洋史・中国古典のマンガ作品化にもあてはまるであろうことはよく知られる〔陳 曦 子 2012〕。近年までの作品で酒見賢一作、森秀樹作画、久保田千太郎脚本『墨攻』、原泰久『キングダム』、伊藤悠『シュトヘル』、瀬下猛『ハーン -草と鉄と羊-』などのタイトルがあげられよう。こうしたかたちで漫画を用いた歴史叙述の可能性はすでに模索されてきている。西洋史含む世界史マンガの存在は、我が国におけるマンガによる歴史叙述の醸成を示すメルクマールといえるかもしれない。

6．おわりに

マンガ表現の進歩は著しく、マンガを読みなれない読者は現在のマンガのコマ割りや欄外注釈、設定の世界観・登場人物描写の多彩さにすら戸惑うほどであろう。今なおマンガ企画を活字出版より下にみる風潮は残るものの、現状、メディアとしてのマンガは豊かな表現の可能性を持ち、適切な監修者・原作者・作画家、そして類する映像メディアとの連携によって、さまざまな表現を託し得るものといえる。

時代劇・エスエフ作品を超えた歴史マンガは、今後は、マンガという文芸メディアと史実考証のアカデミズムの間で、マンガ作家たちと専門歴史研究者の双方から歩み寄った新しい歴史叙述を可能にするように思われる。これをヴィジュアル・ヒストリーの試みとして、本研究では今後ともその両者の動向を注視してゆきたい。

をとってみても、その手続きは学術的な歴史の再構築、歴史叙述と差はない〔幸村 2018 ほか〕。むしろ活字だけでは描き切れない空間描写や記号を説明しようとする点で、文化史叙述においては優れた成果を残しているともいえる。

４）またこれらは、中等教育の教室で習う世界史の教材には収まりにくい。特定の教科上の学習目的、あるいは政治や信仰のイデオロギーや、特定の歴史観に導く、訓導マンガでないことはもちろんのこと、偉人の事績、記憶すべき史実を教える意図が先行した物語ではない。また物語上、不法行為・性的暴力・残虐行為といった描写を避けないためである。教室の教材とする前に読み手が受けるショックに配慮し十分な教材研究が欠かせない作品群でもある。

以上四点の特徴が示すところ、こうした作品群は、ここにはテキスト主体で構成されてきた歴史叙述に比すべきグラフィック・ノヴェルにとどまらないヴィジュアル・ヒストリーの在り方を指し示すもののように思われる。

５．手塚治虫版『世界の歴史』とアンソロジー

新しい西洋史マンガと学習マンガの世界歴史を対比的にとりあげてきたが、そうした見方に立って改めてみると中公コミックス版（手塚治虫監修・キャラクターデザイン、樺山紘一編集参与）の異色さが際立ってくる。

手塚版世界の歴史は、構成上、マンガ本体に口絵や解説コラム（作成はフロッシュ）でマンガによる叙述の不足を補うという体裁である点で、先行する日本史学習漫画や後続の世界史マンガと同じである。しかしマンガ作家自身が監修と、各巻別作画担当とともにキャラクターデザインを担当し、一方西洋文化史の専門家の樺山紘一（西洋中世史家、現印刷博物館長）を編集参与とする布陣は珍しい。樺山は当時『現代思想』誌ほかで文化論客としても知られ、メディアを超えた活動を行っていた歴史研究者であった。

その体制で作成された手塚版の学習世界史は、いわゆる重要人物名や事件名、教科書の単元に則した用語群に、物語を誘導・束縛されることなく、無名の同時代の登場人物を多く起用して完全なフィクション・ドラマを演じさせる展開が目立つ。そのドラマへの導入までには、教科書的な時代背景説明がなされるが、手塚が目指したと

としている点が注目に値する。実在する史資料や史跡のリアリティを意識し、娯楽性やフィクションの必要と認めつつも、当該の歴史や文化を知る人（現地の人）をネガティブに驚かすような間違いは意図して避けようとしている。これは作画家として資料担当や原作者に従うだけでなく、マンガ家として主体的に作画上の歴史性を意識している証拠であろう。

２）そのため史資料でカバーしきれない史実や同時代背景の仮説的再構築にも意識的であり、その際も考証家（専門家・研究者）との学術コミュニケーションも惜しんでいない〔幸村誠 2018〕。仮説的再構築を史資料から行うことでは目的を共有する歴史研究者たちも、彼らに対して単なる考証者としてではなく、その学術的な経験から歴史叙述家同士として向き合っているのである〔大谷哲 2015〕。萩尾望都は『王妃マルゴ』を、歴史家たちがあまりにも主人公をネガティブに描くことに異をとなえるべく、マンガによる歴史叙述を試みたという。これも学際的な営みの一つと言えよう〔萩尾 2015〕。

３）それでいて、マンガ作家の作家性が前面に出され、教養としての史実の紹介や、既存の歴史叙述の翻案にとどまらない物語作品となっていることも特筆できよう。一個のマンガ作品として「キャラクターの立った」主役を中心とし、それに史実をからめる歴史叙述につとめている。異能の人物事績や著名な大事件の展開のみで話が進められる歴史ドラマ・時代劇とはせず、同時代世界を再描写しようとする姿勢がみられる。惣領の描くチェーザレ・ボルジアも、幸村のクヌート、岩明のアレクサンドロス、大窪のヴラド、いずれも超越した主人公としての魅力を描きこまれているものの、その特殊な個性に依存した偉人伝としてではなく、ある時は残虐で不道徳な個性と、その人格を包括する同時代の諸設定によって物語を進められている。わき役たちも決して主役の引き立て役ではなく、歴史の舞台にそれぞれが立ち位置を示す。

世界史の流れを遠景におき、近景でマンガ作者たちは歴史的な再構築を模索する。主役や取り上げる史実はいわゆる著名人ではなくともよく、世界史上でもあまり注目を集めてこなかったテーマや人物がとりあげられ、教科書では触れられることのない解説が付く。それは一概に非専門家による虚構、不確かなフィクションとは言い切れない知的態度があり、フィクションを加える匙加減

お、マンガ作品としての表現個性の場とはなりえていないように思われる。

４．歴史マンガの新地平

今世紀に入り、月刊のマンガ専門誌や文芸誌に連載（『アフタヌーン』誌や『ハルタ』誌、『新潮』誌）された青年マンガのタイトルに、歴史物が目立つようになった。それもたとえ歴史好みで関心のある我が国の読者にも目新しい題材で、原作（シナリオや設定）やマンガの執筆に際しても調査や取材に負担が大きいであろう外国史それも前近代西洋史を題材としている点で注目に値する。現状の文化誌情報のみならず、外国諸語とその出版についても目配りが必要となるからである。

代表する作品例を連載中のものを中心に列挙する。

・岩明均『ヒストリエ （Historie） 』講談社（単行本既刊 11 巻：2003.1-）
・幸村誠『ヴィンランド・サガ （Vinland Saga）』講談社（既 22 巻：2005.4-）
・惣領冬実『チェーザレ 破壊の創造者』原基晶（監修）講談社（既 11 巻：2005-）
・ヤマザキマリ、とり・みき『プリニウス （Plinius）』新潮社（既 9 巻：2014.1-）
・大窪晶与『ヴラド・ドラクラ （Vlad Drăculea）』株式会社 KADOKAWA（既 3 巻：2020.2-）

マンガによる西洋史劇としては、すでに池田理代子による近世ヨーロッパ史劇、青池保子の西洋中世史劇、東洋史での横山光輝以降の史記･三国志演義物などがあり、硬派の時代劇として広く人気を得てきたことはよく知られる。こうした「大河ドラマ的」作品にくわえ、大小の時代劇もマンガで描かれている。ノスタルジックな舞台設定を西洋前近代に借り、時間旅行や魔法を使ういわば「歴史エスエフ」の作品群も含めると、西洋史マンガは多く発表されてきているといえる（資料《西洋前近代史（古代～近世）マンガ》参照）。そうしたなか前掲の諸作品が異なる点は以下にまとめられよう。

１）それらは、便宜的なフィクションを前提とした時代劇や歴史ドラマとしてでではなく、史実や資料・史跡解釈についてまがりなりとも作家自身も行い、必要であれば専門知見も得たうえで、歴史叙述として描かれよう

てしまい、教科書叙述をマンガの挿絵で後追いする形となりがちである。ドラマにしやすい物語断片については、ヨーロッパ中世を扱う巻では、どのシリーズも「カノッサの屈辱」の話題を選んで紙幅を割き、教権と皇帝権の確執をキャラクターを整えて描く。しかしその物語化が困難な叙述部分については、入れ代わり立ち代わり世界史重要人物が登場して、数コマ～数ページずつ活動して場面転換に至るというパターンの繰り返しとなる。そこでは、オリジナル時代劇マンガであれば可能になっているキャラクターの内面性や世界観の確立がはたされない〔渡辺信一郎　2015〕。シナリオの工夫次第であるとしても、マンガで物語展開を行うには、世界史に与えられた紙幅が少なすぎるのも事実であろう。それに応えた形で『集英社学習まんが 中国の歴史』全 11 巻セット 2008年が世界史から切り出して出版されたのであろう。

しかしながら日本史・世界史いずれにしても、学習マンガはマンガ作品の発表の場というよりは、教科書や監修者、原作者のテキスト主体の歴史叙述に、作画家がイメージを提供するにとどまる形になっているといえよう。それでも現在のマンガ表現の発展が、学習漫画にも及んだ結果生じた影響は小さくない。現在のマンガ表現に顕著な「キャラ」化の問題について学習漫画における人物描写において検証した伊藤遊〔2013〕によれば、「科学的事実を重視してきたはずの学習マンガが、…これまで参照にされてきた写真や肖像画を全く無視して、新たなヴィジュアルを創造していくというのは、学習マンガ史上における大きなパラダイム変換であるといえる」事態となっている。〔宮本大人 2003〕が提言し〔伊藤剛 2005〕によって展開されたキャラクターの「キャラ」化は、二次創作へのキャラクター運用を広げるなど漫画文化の拡大に貢献するものである。しかし歴史マンガにおける著名キャラクターの多くは、それ自体が研究成果による構築物として常に議論にさらされる対象である。人物や場面の印象を読者に刻印するような描写には、監修者レベルからの注意が必要であったろう。そのような作画家の漫画演出が、読者を驚かせた例も海外で紹介されている。〔Stimson, posted on 2014-01-31 17:30 EST〕。取り上げるべき史実項目が多く、それぞれの物語が薄くなりがちな世界史の教科書叙述を原案にしている学習世界史マンガは、副教材としての地位を得つつも、いまな

としての『詳説世界史研究』執筆陣と重なる橋場弦以下、9名の現役の歴史研究者を監修として置いている。

学研ＮＥＷ版もまた、フルカラー図版、人気画風の作画者に作画を依頼、教科書準拠、監修者のステータスを備えている。〔集英社漫画版世界の歴史 2009＝2019〕は文庫版にもなっている（資料《学習マンガ世界の歴史シリーズ》参照）。

３．歴史学習マンガ

しかしながら、商業マンガ一般と異なり、学習マンガの歴史物・伝記物が、マンガ作品としてマーケットで流通しているわけではない。学習マンガはしばしば書店の学習参考書棚、あるいは叢書・全集のコーナーにおかれ、売上や人気のレースで一般漫画と上位を競うことはほぼない。また作者の画風、物語の内容についてマス・メディアや専門学術界でも話題を喚起することも乏しかったように思われる。

マンガジャンルにおける歴史マンガの位置づけは、学習漫画の日本史においても同じであるが、日本史シリーズのほうの事情はやや明るい。近年までに教科書をわかりやすく学習するに教材として広く認知され、受験対策での意義が認められたためである。主人公が受験対策に日本史学習漫画を愛読する姿が『映画 ビリギャル』（監督 土井裕泰 2015、原作坪田信貴）において演出されるなどした。日本史企画は参加出版社数もおく、シリーズの再版や新発行のペースも世界史版に比べて早い。これは自国文化を取り上げるという強みもあるが、現役著名マンガ家たちが、個人で日本史（石ノ森章太郎『マンガ日本の歴史』や水木しげる『コミック昭和史』）や、日本古典についての執筆を手掛けるなど、学習に使えるマンガが充実を見せることも支えになってきたといえよう。学習マンガ日本史については、監修者や編者のコメント〔永田喜嗣 2017、鍋田吉郎 2017、小泉隆義 2017〕が発表されたり、専門分野（日本考古学）知見からの丁寧な批評がなされたが〔櫻井準也 2019〕、世界史企画においては見当たらない。

これは世界史分野がカバーすべき分野のスケールが大きすぎ、紙幅の都合からもマンガにふさわしく物語を切り出すことが困難ということが大きいと思われる。いきおい教科書の叙述を挿画でサポートする形にとどまっ

なることを期していたこと表明している。

「歴史を漫画で説明しようというのはかなり冒険である。しかし、文字で読んでも、耳から聞いても、人それぞれに頭の中ではその光景を絵に描いているのである。それが子供たちの頭の中で全くの絵空事にならないように、今の歴史研究の段階では、このくらいのところまではマンガにすることができるのではないかという試みがこの企画である。…それぞれの専門研究家の指導によって一巻ごとの構成を決め、作図や文章表現も考慮しているので、誤った知識を得る恐れはないと思う。そして、多分、大人が読んでも、あるいは見ても、十分に楽しみながら日本歴史の学習ができるのではないかとも考えている。…楽しみながら正確な知識が得られることを願う次第である。」

児玉は歴史叙述をマンガ表現ですべてを代替できるとは考えていない。文字・図版による解説を補い、また監修者によって内容をコントロールすることで、マンガを補い、マンガのメリットである楽しさを生かそうとした。ここには歴史叙述のためにマンガ表現を借りるという関係がある。この児玉の歴史叙述と学習歴史マンガ観は、その後の学習漫画日本史の諸シリーズにおいても受け継がれ、歴史学習漫画一般の基本スタイルとなって現在に至る。

２．学習マンガ世界の歴史シリーズ

学習マンガの世界史版が、この日本史版の成功と受容を受けて、後追いで企画されてゆく（資料《学習マンガ日本の歴史シリーズ》参照）。〔中央コミック『世界の歴史』1984〕の手塚治虫監修・キャラクターデザイン、樺山紘一編集参与のものが嚆矢であったが、むしろ日本史の学習漫画と人気連動し、日本史企画をひき継いだ形の〔集英社版学習漫画『世界の歴史』1986〕の編集スタイルが後のスタイルを作り上げた。集英社版は監修者に西洋史家の木村尚三郎をおき、原作者と作画者の二人三脚で教科内容をマンガ化してゆく。ただし世界史スケールの大きさのため、後年、出版社によっては地域・時代・単元ごとに専門監修者が配置されるようになる。現在の〔小学館『世界の歴史』2018〕の全 17 巻シリーズは、採択の多い教科書『世界史Ｂ』の出版元である山川出版社が編集協力し、その『世界史Ｂ』教科書および副読本

《中間報告》
世界史叙述メディアの新地平
学習歴史漫画を超えて

草生 久嗣

本稿は現在計画中の研究プロジェクト「人文社会系研究分野における成果報告メディアの開発—歴史学と歴史マンガの比較考察から」の中間報告である。2019年度における資料状況を報告し、学習漫画世界の歴史シリーズおよび前近代西洋史マンガのタイトルの紹介したい。

学習マンガジャンルの隆盛は、文章でなくマンガであって「主食ではないおやつ（手塚治虫）」だから人気なのではなく、その叙述の平易さ、読者を意識した解説のすぐれた実践例と評価されたからでもある。大学教科書、ビジネス書、国内外の古典籍について漫画解説が企画出版され続けることはそれを物語る。

日本史および世界史の学習マンガ出版は、1960 年代から大手出版数社によって取り組まれ、現在まで版を改めて複数シリーズを揃えるに至っている。各巻 A4 版ハードカバーで二百ページ規模、カラー刷りページも多用され、写真図版をそなえて、シリーズごとに十巻から二十巻におよぶ多巻で刊行される〔櫻井準也　2019〕。恐竜や昆虫などを解説する理科マンガと並んで、歴史部門の存在感は学習支援（子供向け）・教養解説（一般向け）マンガというジャンルの中でも突出しているといえる。

１．学習マンガ日本の歴史シリーズ

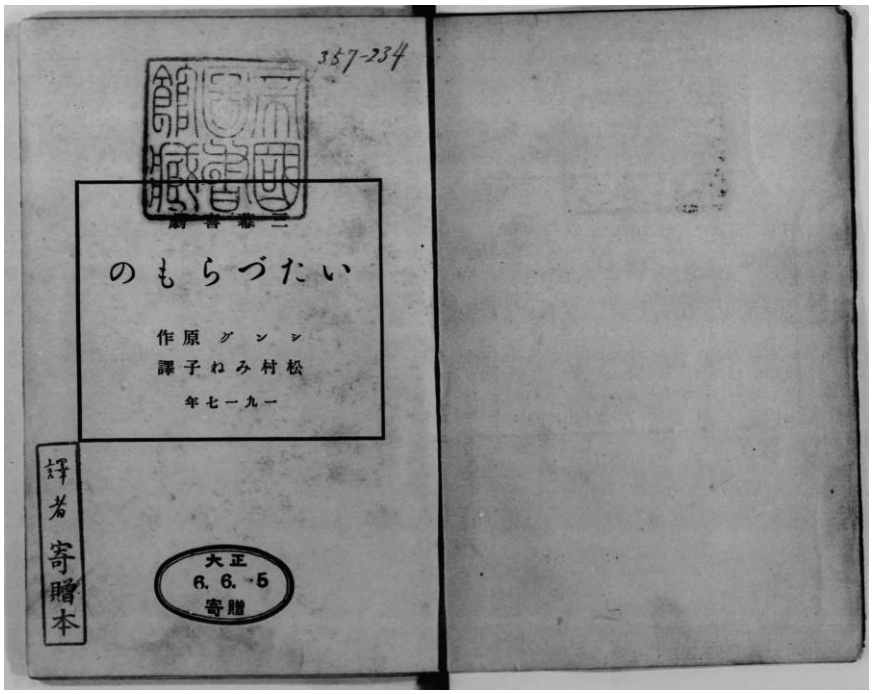
ジャンルの筆頭立役者である『集英社 学習漫画日本の歴史』全 18 巻 1968 年（和歌森太郎考証・解説、カゴ直利・宮坂栄一画）は、その完成度において今なお評価が高い。もともと同社の活字による『少年少女日本歴史全集』の姉妹編で、理科学習漫画と同時企画された。マンガ本体に口絵、写真図版、図表を補い、コマ内外に背景説明やト書きを付すなど、学習歴史漫画の基本スタイルを確立した。

これに続く企画、小学館版『学習漫画少年少女日本の歴史』には監修者児玉幸多が添え書きよせている。そこで児玉が学習歴史マンガ出版に歴史叙述の新メディアと

The first edition of Hiroko's translation of *The Playboy of the Western World.* (1907) by J.M.Synge

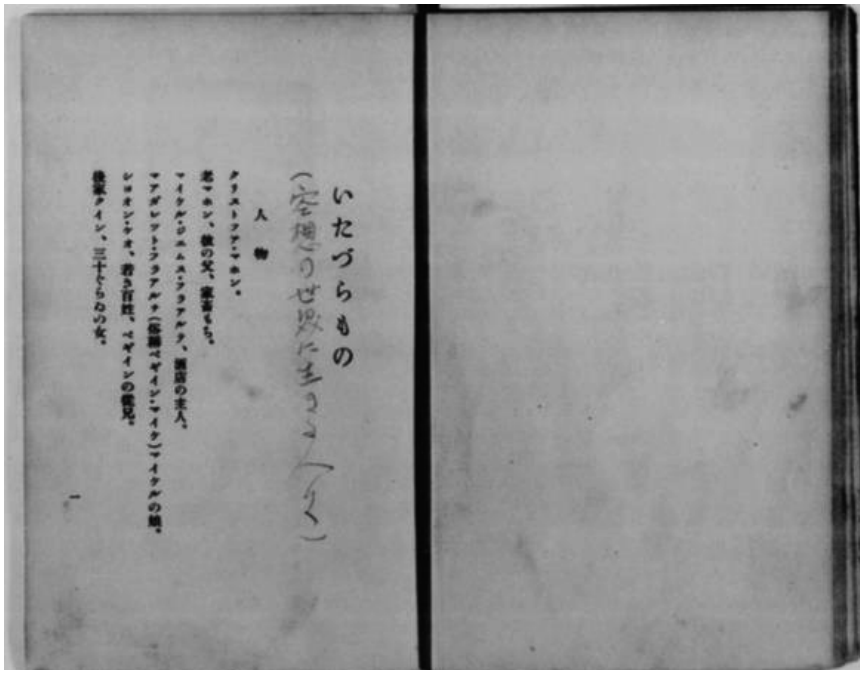
The title-page

This first edition was donated to the National Diet Library by the translator in 1917.



The list of characters in the play

There is a hand-written phrase 「（空想の世界に生きる人々）」 ('people who live in an imaginary world') next to the title. It was probably written by Hiroko.



I have treated myself as if

I am a piece of stone or wood.

But when I am ill, I take care of myself.　(1919)

石くれか木のはしくれとあつかひしこの身なれども病めば尊し

The concept of a stolen soul and considering herself to be ‘a peace of stone or wood’ in these tanka poems can be interpreted in relation to representations of ‘changelings’.

In her real life, she had to spend many years at home doing housework, performing child care and taking care of her family like most contemporary women. Therefore, in her tanka poems she transcends boundaries and describes her soul wandering among this world and that which lies beyond. Moreover, through translating Irish literature, she learns about ‘changelings’ and becomes attracted to the idea.

Gregory, Lady Isabella Augusta. “The Full Moon”.*New comedies.* New York : The Knickerbocker press, 1913.

Yeats.William Butler. *Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry.*　London : Walter Scott, 1888.

——. *The Land of Heart's Desire* (seventh edition). London: T Fisher Unwin. 1912.

秋谷美保子『片山廣子全歌集』短歌現代社、2012 年.

井上十吉『新訳英和辞典』三省堂、1911 年.

松村みね子訳「満月（レディ・グレゴリー）」『心の花』第 18 巻第 1 号、1914 年、1－27 頁.

——「心のあこがれる國（イエーツ）」『愛蘭戯曲集 第一巻』玄文社出版部、1922 年、397‐431 頁.

——「心のゆくところ（イエーツ）」『近代劇全集 第廿五巻 愛蘭土篇』第一書房、1927 年、37－87 頁.

永井泉「片山廣子の短歌に詠まれた『魔』―第一歌集『翡翠』刊行までの短歌について―」『文学史研究』第 59 号、2019 年、42－57 頁.

佐佐木幸綱「解説：片山廣子の『境地』」片山廣子／松村みね子『野に住みて（短歌集＋資料編）』編集：大西香織、月曜社、2006 年、645‐671 頁.

from the dull house where she is deprived of her freedom. Then the fairy child comes to her and calls upon Maire to ride upon the winds with her. At the end of the play, she yields to the fairy's temptation and goes to their world with her, which leads to Maire's death. Her husband's mother, Bridget, says the following to her son:

> Come from that image; body and soul are gone
> You have thrown your arms about a drift of leaves,
> Or bole of an ash-tree changed into her image.
> (7th ed. Revised,1912)

Hiroko translates 'fairy child' in this play into 「魔(フェアリー)の子」 ('manoko') in Japanese .The use of 「魔」in Hiroko's translations of *The Full Moon* and *The Land of Heart's Desire* seem to correspond to 「魔」 in her tanka, which reveals her wish to be tempted by a supernatural being.

'Changelings' in tanka poems by Hiroko

In recent times, her tanka poems in the first collection 『翡翠』have been re-evaluated by scholars. Yukitsuna Sasaki, who is the great-grandson of Hiroko's teacher Nobutsuna Sasaki and a president of tanka association Kokoro no Hana, focused on her frequent use in the collection of the word 「われ」('ware'), which means 'I' in English. He points that Hiroko is not satisfied with the real world and 「われ」, her soul, wanders among real and imaginary worlds or her former and future lives.

Furthermore, in Hiroko's tanka poems, there are certain works which are able to be interpreted as representations of 'changelings'.

> Somebody has stolen my soul.
> I will never tell anyone that
> I am weary of searching for it. (1918)

ぬすまれし我のこゝろを追ひ求め疲れたりとは人にもつげじ

‘Changelings’ in Irish fairy folklore

W.B, Yeats stated the following concerning ‘changelings’ in his work *Fairy and Folk Tales of the Irish Peasantry* (1888):

> Sometime the fairies fancy mortals and carry them away into their own country, leaving instead some sickly fairy child, or a log of wood so bewitched that it seems to be a mortal pining away, dying and being buried.

Hiroko translated the Irish fairy tale ‘Jamie Freel and the Young Lady’, which is categorised as ‘changelings’ in the Yeats’s collection, into Japanese. She published it in *Kodomo no Sekai*, a periodical for children, in 1949. In the tale, fairies steal a young woman and leave a stick in her place which takes her exact form.

‘Ma’ (魔) in Hiroko’s translations of Irish Plays

Hiroko published ‘Mangetsu’ in *Kokoro no Hana* in 1914 as a Japanese translation of Lady Gregory’s play *The Full Moon* (1910). It was her first translation work of Celtic revival literature. *The Full Moon* is a one-act comedy that centres on peasants who believe that everything should be at its worst when the moon is full. In the end of the play, Mr. Halvey, who is a distinguished man living in a country town, leaves the town to secure his freedom. People in the town think that he has gone mad when Halvey pours his heart out like a different person. One of them, Mrs. Broderik says, ‘If there are fairies in it, it is in the fairies he is’. The line can be interpreted as saying that Mr. Halvay suffers ‘changelings’ by fairies. Hiroko translates her statement into Japanese as 「もし魔物(フェヤリー)といふものがあるなら、あの人もお仲間入したんですね」. That is, she seems to understand the sense of these words as relating to ‘changelings’.

The Land of Heart’s Desire (1894) by Yeats is also a one-act play based on ‘changelings’. The play tells of the legend that on May Eve the fairies may steal away a newly married bride. Hiroko published Japanese translations of the play in 1922 and 1927.

A newly married bride named Maire calls on the fairies to take her

Synge, into Japanese.

As for tanka writing, Hiroko published only two collections of tanka poems in her life time. The first was *Kawasemi* (翡翠), meaning 'kingfisher', which was published in 1916. Her second collection of tanka poetry was *No ni sumite* (野に住みて), meaning 'living in the field', which was published in 1954.

Therefore, it has been difficult for tanka poets and researchers to evaluate Hiroko's works fully. However, complete volumes of her works have recently published, and in response more critical evaluations on her writings has been published.

The word 'ma' (魔) in Hiroko's tanka poems

Hiroko is considered a poet who transcended boundaries, seamlessly moving between worlds. She composed poems on mortality and death from the perspective of the dead and on encounters with supernatural beings like goblins and ghosts.

In the first decade of the 1900s, Hiroko often used the word 'ma' (魔) in her tanka poems. According to a 1911 Japanese-English dictionary, the word 'ma' means 'a demon', 'evil' and 'an evil spirit'. For example, the following tanka poem appears in *Kokoro no Hana* in 1910. Translations of Hiroko's tanka poems in this paper are literal ones. They convey only the meanings of the original texts.

> In the evening the wind blows with the fragrance of roses,
> I await even an evil spirit who tempts me to go out
> standing alone by the window. (1910)

風かをるうばらの窓に一人ゐて魔のさそひさへまたるゝ夕べ

This tanka poem can be interpreted as representing Hiroko's wish to be taken away to another world by a supernatural being, as she is tired of living in the real world.

It is worthy of note that Hiroko translated the word 'fairy' into Japanese as 'ma' (魔) or 'mamono' (魔物) in plays by Lady Gregory and W.B. Yeats. This differentiates Hiroko's translations from other Japanese translations of these plays. In addition, fairies that appear in both of these plays are related to the 'changelings' of Irish fairy folklore.

The Reception of ‘A Fairy’ in Modern Japanese Literature:
‘Changelings’ from Irish fairy folklore in Hiroko Katayama’s Works

Izumi Nagai

（abstract）

This paper focuses on the word ‘ma’ (魔), meaning ‘an evil spirit’, in works by the Japanese *tanka* poet and translator Hiroko Katayama (1878–1957). Hiroko translated the word ‘fairy’ from Irish plays into ‘魔’ and ‘魔物’ in Japanese. She used the word ‘魔’ in her *tanka* poems that can be interpreted as representing Hiroko’s wish to be tempted by an evil spirit. Moreover, she writes certain *tanka* poems that can be interpreted as representations of ‘changelings’.

Japanese *tanka* poet and translator Hiroko Katayama

Hiroko Katayama was born in 1878 in Tokyo and died in 1957. Although Hiroko never travelled outside Japan during her lifetime, she was familiar with Western culture and began learning English when she was five years old because her father was a diplomat who was stationed in China, England and the United States. Beginning at the age of ten, she was educated for seven years at Toyo Eiwa Jogakuin, a private mission school. The school was opened by a missionary sent on behalf of the Woman's Missionary Society of the Methodist Church of Canada.

After graduating, she became the pupil of the famous poet and scholar Sasaki Nobutsuna, from whom she learned Japanese classical literature and how to write tanka poetry. Then she submitted tanka poems, essays and translations to be published in the literary journal *Kokoro no Hana*, edited by Nobutsuna. At that time, she was recognised as one of the representative poets of this coterie of writers.

In 1899, she married a banker and had two children. Later, both her husband and son died when they were middle-aged. Since the beginning of the Taisho Era, Hiroko had published translations under the pseudonym Mineko Matsumura. She mainly translated Celtic revival literature, including works by W. B. Yeats, Lady Gregory and J. M.